

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第23輯

都市計画道路磯之上山直線建設に伴う

西大路遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第23輯

都市計画道路磯之上山直線建設に伴う

にし おお じ
西大路遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1 9 8 8

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



壺



壺



高杯



鉢、製塩土器、手焙形土器

序 文

都市計画道路磯之上・山直線は、近畿自動車道と歌山線と阪神高速道路大阪湾岸線を結ぶ幹線道路として計画され、泉州方面（岸和田市内を縦貫する道路）の主要道路として関西国際空港のアクセス道路として位置づけられておりまして全線が早期に供用出来るよう建設が急がれております。

本道路は、岸和田市北部に位置し、大阪湾岸から牛滝川流域の谷筋にそって岸和田市内を縦断し、近畿自動車道と歌山線の岸和田 I C 並びに国道170号（外環状線）に連絡する予定であります。

道路予定地周辺は、海岸部近くで縄文・弥生・古墳・奈良等の各時代の集落跡・古墳・寺跡などの遺跡が知られていますが、その実態についてはあまり明確ではありません。

今回報告いたします西大路遺跡は、昭和59年度に道路予定地を大阪教育委員会が試掘調査を実施された結果、遺跡の範囲が確定できたものであります。以上の調査結果を受けて本協会が大阪府教育委員会の指示を受け、大阪府岸和田土木事務所と委託契約を締結し発掘調査を実施したものであります。

調査の結果、その詳細な説明は本報告書に記載いたしました。弥生時代と古墳時代の集落跡を中心とした遺構を多く検出することができました。なかでも弥生時代後期の竪穴式住居跡については、その遺構の遺存状態が良く住居の構造がよく残され住居跡の変遷研究に貴重な資料の提供となりました。その他の遺構についても数多く検出することができました。

本発掘調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府土木部、大阪府岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、その他地元関係者の皆様に多大なるご協力、ご支援を賜り、深く感謝いたします。

また、今後の当協会の調査等に、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和 63 年 3 月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

1. 本書は都市計画道路磯之上山直線建設予定地内に所在する、西大路遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は大阪府埋蔵文化財協会技師、高島徹、橋本高明、伊藤純、岡戸哲紀、岡本武司が担当し、昭和61年5月24日に現地調査を開始、昭和62年3月28日に終了した。引き続き実施した整理事業を昭和62年12月25日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。
5. 調査および報告書作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課の他、酒井龍一（奈良大学）、近藤利由（岸和田市教育委員会）、植木久（財団法人大阪市文化財協会）、北野信彦（財団法人元興寺文化財研究所）の各氏からご指導、御教示を受けた。記して感謝の意を表す。
6. 本調査では、木製品の樹種鑑定をパリノ・サーヴェイ株式会社、木製品の保存処理を財団法人元興寺文化財研究所に、花粉、珪藻分析を川崎地質株式会社それぞれ委託し、実施した。
7. 遺構写真撮影は調査各担当者、遺物の写真撮影は小倉勝が担当した。
8. 調査は当協会の発掘調査規程により国土座標第VI系を基準に地区割りを設定して行なった。本文中および挿図に用いた座標もこれに従い、方位は座標北を示す。地区名の表記は地形図の標題を略し、500m区画以下4m区画まで示した。地区割りの大要は第I章第3節に記した。なお標高はT、P、で表示した。
9. 本書で用いた遺構の呼称は当協会の発掘調査規程の表記に基づき遺構の種類にかかわらず検出順に通し番号を付し、遺構の記号を記入して種類を示した。記号は以下の通りである。

OB	建物	OD	竪穴住居	OI	水利施設	OL	池・沼
OO	土坑	OP	ピット	OR	河川	OS	溝

OW 井戸 OZ 水田 OX その他・不明

10. 井戸の各部分の名称は、広島県草戸千軒町遺跡研究所編「草戸千軒町遺跡―第18～20次発掘調査概要―」(1976)による。
11. 遺物図には通し番号を付し、本文中の遺物番号は遺物図、図版のそれと一致する。
12. 本書で用いた土壌色は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖5版』(1976)による。
13. 第3図は、千地万造編「岸和田市付近地質図」『岸和田市史』第1巻付図1 岸和田市史編さん委員会(1978)、第5図は大阪府教育委員会文化財保護課発行「大阪府文化財分布図」(1986)をもとに作成した。
14. 本書は第I章を橋本、第II章を橋本、岡戸、第III章第1節を橋本、岡本、第2節および第3節を橋本、岡本、岡戸、第IV章は橋本が執筆した。編集は橋本を主担とし、岡戸、岡本が補助した。

本文目次

序文	i
例言	iii
本文目次	v
挿図目次	vii
図版目次	xi
表目次	xiv
第I章 経過	1
第1節 既往の調査	1
第2節 調査に至る経過	1
第3節 調査の方法	2
第II章 位置と環境	4
第1節 西大路遺跡の位置と微地形	4
第2節 地理的・歴史的環境	4
第III章 調査成果	10
第1節 基本層序	10
第2節 弥生時代～奈良時代	16
1. 竪穴住居	16
2. 土坑	31
3. 溝	39
4. 自然河川・水利施設	41
5. 不明遺構	64
第3節 平安時代～室町時代	75
1. 掘立柱建物	75
2. ピット群	80
3. 土坑	82
4. 井戸	91
5. 溝	97

6. 水田遺構	102
7. 沼・その他の遺構	103
8. 包含層出土遺物	105
第IV章 まとめ	122

挿 図 目 次

第1図	地区割模式図	3
第2図	岸和田市位置図	4
第3図	岸和田市付近地質図 (1/100,000)	5
第4図	調査区位置図 (1/5,000)	6
第5図	周辺遺跡分布図 (1/20,000)	7
第6図	I区土層図 (上下1/40、左右1/100)	12
第7図	II区土層図 (上下1/40、左右1/100)	13
第8図	IV区土層図 (上下1/40、左右1/100)	14
第9図	V区土層図 (上下1/40、左右1/100)	15
第10図	919-OD平・断面図 (1/60)	17
第11図	919-OD遺物図 (1/4)	18
第12図	506-OD、507・509・511~513・515・923-OO平・断面図 (1/60)	19
第13図	506-OD遺物図 (1/4)	20
第14図	1367・1368・1375-OD、1366・1371・1377-OO平・断面図 (1/60)	21~22
第15図	1370-OD、1385-OO平・断面図 (1/60)	23~24
第16図	1367・1368・1375-OD遺物図 (1/4)	25
第17図	1370-OD遺物出土状況図 (1/30)	26
第18図	1370-OD遺物図1 (1/4)	27
第19図	1370-OD遺物図2 (1/4)	28
第20図	1384-OD平・断面図 (1/60)	29
第21図	1384-OD遺物図 (1/4)	30
第22図	521-OO遺物図 (1/4)	32
第23図	521-OO平・断面図 (1/40)	32
第24図	521・507-OO遺物図 (1/4)	33
第25図	1364-OO遺物図 (1/4)	34
第26図	1364・1365・1378-OO平・断面図 (1/40)	35
第27図	1372・1383-OO平・断面図 (1/40)	36

第28図	1366・1372・1378-OO遺物図 (1/4)	37
第29図	1379-OO平・断面図 (1/40)	37
第30図	1379-OO遺物図 (1/4)	38
第31図	1385-OO遺物図 (1/4)	39
第32図	1373・1374・1376-OS平・断面図 (1/60)	40
第33図	503・1373・1376-OS遺物図 (1/4)	41
第34図	503-OS断面図 (1/40)	41
第35図	508・522-OR遺物図 (1/4)	41
第36図	501-OR建築部材出土状況図 (1/40)	42
第37図	924-OI平・断面図 (1/30)	43
第38図	501-OR遺物図 1 (1/4)	44
第39図	501-OR遺物図 2 (1/4)	45
第40図	501-OR遺物図 3 (1/4)	46
第41図	501-OR遺物図 4 (1/4)	47
第42図	501-OR遺物図 5 (1/4)	48
第43図	501-OR遺物図 6 (1/4)	48
第44図	501-OR遺物図 7 (1/16・1/10)	49
第45図	924-OI遺物図 (1/8)	50
第46図	925-OI平・立面図 (1/40)	51
第47図	925-OI遺物図 (1/8)	52
第48図	1360-OR遺物図 (1/4)	53
第49図	922-OR遺物図 1 (1/4)	54
第50図	922-OR遺物図 2 (1/4)	55
第51図	922-OR遺物図 3 (1/4)	56
第52図	922-OR遺物図 4 (1/4)	57
第53図	926-OR遺物図 1 (1/4)	59
第54図	926-OR遺物図 2 (1/4)	60
第55図	926-OR遺物図 3 (1/4)	61
第56図	502-OR遺物図 (1/4)	62
第57図	1647-OR遺物図 (1/4)	62

第58図	1641-O R遺物図 (1/4)	63
第59図	533-O X平・断面図 (1/30)	65
第60図	533-O X遺物図 1 (1/4)	66
第61図	533-O X遺物図 2 (1/4)	67
第62図	533-O X遺物図 3 (1/4)	68
第63図	533-O X遺物図 4 (1/4)	69
第64図	533-O X遺物図 5 (1/4)	70
第65図	533-O X遺物図 6 (1/4)	71
第66図	533-O X遺物図 7 (1/4)	72
第67図	533-O X遺物図 8 (1/4)	73
第68図	533-O X遺物図 9 (1/4)	74
第69図	914-O B平・断面図 (1/80)	75
第70図	915-O B遺物図 (1/4)	76
第71図	915-O B平・断面図 (1/80)	77
第72図	1359-O B平・断面図 (1/80)	78
第73図	1273-O B平・断面図 (1/80)	79
第74図	1273-O B遺物図 (1/4)	80
第75図	1369-O B平・断面図 (1/80)	80
第76図	1228-O P遺物図 (1/4)	81
第77図	1005・1007-O O平・断面図 (1/20・1/40)	82
第78図	1014-O O遺物図 (1/4)	82
第79図	1021-O O遺物図 (1/4)	83
第80図	1021-O O平・断面図 (1/20)	83
第81図	1149・1150-O O遺物図 (1/4)	83
第82図	1014・1015・1057・1211-O O、1215-OW、1020-O S、1205-O X 平・断面図 (1/60)	84
第83図	1160-O O平・断面図 (1/40)	85
第84図	1160-O O遺物図 (1/4)	85
第85図	1200-O O遺物図 1 (1/4)	86
第86図	1200-O O遺物図 2 (1/4)	86

第87図	1201-OO遺物図 (1/4)	86
第88図	1200・1208・1214-OO、1295-OW、1041-OS平・断面図 (1/40)	87
第89図	1201・1443-OO、1017-OS平・断面図 (1/40)	88
第90図	1214-OO遺物図 (1/4)	89
第91図	1429・1430・1431-OO平・断面図 (1/40)	90
第92図	1151-OW遺物図 (1/4)	91
第93図	1148・1221・1236・1251・1295-OW平・断面図 (1/40)	92
第94図	1204-OW遺物図 (1/4)	93
第95図	1204・1215-OW平・断面図 (1/40)	93
第96図	1148・1215・1236・1295-OW遺物図 (1/4)	94
第97図	1221-OW遺物図 (1/4)	94
第98図	1251-OW遺物図 (1/4)	95
第99図	1004・1005・1007-OO、1002・1003・1006・1008～1011-OS平面図 (1/100)	97
第100図	1012・1013・1216-OS断面図 (1/40)	99
第101図	1012-OS遺物図 (1/4)	99
第102図	1013-OS遺物図 (1/4)	99
第103図	1041-OS遺物図 (1/4)	100
第104図	1216・1219-OS遺物図 (1/4)	101
第105図	1000-OZ遺物図 (1/4)	103
第106図	1151-OW、1207-OX平面図 (1/40)	104
第107図	1207-OX遺物図 (1/4)	105
第108図	1251-OW、1209-OX、1605-OL平面図 (1/40)	106
第109図	1209-OX、1605-OL遺物図 (1/4)	107
第110図	包含層遺物図1 (1/1)	108
第111図	包含層遺物図2 (1/4)	109
第112図	包含層遺物図3 (1/2)	110
第113図	包含層、1005-OO、1251-OW、1209-OX、1605-OL遺物図 (1/3)	110
第114図	「ベッド」付き竪穴住居集成図	124
第115図	今木廃寺遺物図	127

第116図 遺構変遷図 1	128
第117図 遺構変遷図 2	128
第118図 遺構変遷図 3	128
第119図 遺構全体図 1 (I区、1/200)	131~132
第120図 遺構全体図 2 (II・III区、1/200)	133~134
第121図 遺構全体図 3 (IV区南部下層、1/200)	135~136
第122図 遺構全体図 4 (IV区、1/200)	137~138
第123図 遺構全体図 5 (V区、1/100)	139~140
第124図 遺構全体図 6 (V区、1/60)	141~142

図 版 目 次

巻頭図版 1 出土遺物 (壺、甕)

巻頭図版 2 出土遺物 (高杯、鉢・製塩土器・手焙形土器)

図版 1 遺跡周辺

図版 2 全景 (I区、III・IV区)

図版 3 全景 (III区、V区)

図版 4 土層 (I区、II区、III区、IV区、V区)

図版 5 竪穴住居 (919-OD、919-OD)

図版 6 竪穴住居 (919-OD、919-OD)

図版 7 竪穴住居 (506-OD、506-OD)

図版 8 竪穴住居 (1368・1375-OD、1368-OD)

図版 9 竪穴住居 (1368-OD、1368-OD)

図版10 竪穴住居 (1370-OD、1370-OD)

図版11 竪穴住居 (1370-OD、1370-OD)

図版12 竪穴住居 (1384-OD、1384-OD)

図版13 竪穴住居 (1384-OD、1384-OD)

図版14 竪穴住居 (1367-OD、1367-OD)

- 図版15 土坑 (521-〇〇、507・509-〇〇、923-〇〇、512・513・515-〇〇)
- 図版16 土坑 (1372-〇〇、1371-〇〇、1379-〇〇、1377-〇〇)
- 図版17 土坑 (1364・1366・1378-〇〇、1364-〇〇)
- 図版18 土坑 (1385-〇〇、1385-〇〇)
- 図版19 溝 (1376-〇S、1373・1374-〇S)
- 図版20 溝・自然河川 (503-〇S・1360-〇R、503-〇S・1360-〇R)
- 図版21 自然河川 (522-〇R、501-〇R)
- 図版22 水利施設 (924-〇I、924-〇I)
- 図版23 自然河川 (922-〇R、922-〇R)
- 図版24 自然河川 (1360-〇R、1361・1362-〇R)
- 図版25 水利施設 (925-〇I、925-〇I)
- 図版26 自然河川 (1641・1647-〇R、1641・1647-〇R)
- 図版27 土器溜 (533-〇X、533-〇X)
- 図版28 掘立柱建物 (914-〇B、543・568・560・600-〇P)
- 図版29 掘立柱建物 (915-〇B、707・681・711・697-〇P)
- 図版30 掘立柱建物 (1359-〇B、1349・1352・1353・1350-〇P)
- 図版31 掘立柱建物 (1273-〇B、1076・1032・1022・1023-〇P)
- 図版32 掘立柱建物 (1359-〇B、1573・1228・1566・1247-〇P)
- 図版33 ピット群 (IV区・IV区)
- 図版34 ピット群 (V区・V区)
- 図版35 土坑 (1014-〇〇、1015-〇〇、1021-〇〇、1021-〇〇)
- 図版36 土坑 (1057-〇〇、1073-〇〇、1149-〇〇、1150-〇〇)
- 図版37 土坑 (1154-〇〇、1073-〇〇、1149-〇〇、1159-〇〇)
- 図版38 土坑 (1200-〇〇、1201-〇〇、1282-〇〇、1208-〇〇)
- 図版39 土坑 (1210-〇〇、1211-〇〇、1214-〇〇、1416-〇〇)
- 図版40 土坑 (1443-〇〇、1431-〇〇、1430-〇〇、1429-〇〇)
- 図版41 土坑・溝 (1007-〇〇、1005-〇〇、1003・1006-〇S・1005・1007-〇〇、1006-〇S)
- 図版42 井戸 (1148-〇W、1148-〇W、1295-〇W、1295-〇W)
- 図版43 井戸 (1251-〇W、1221-〇W、1236-〇W、1236-〇W)

- 図版44 井戸 (1151-OW、1215-OW、1204-OW、1220-OW)
- 図版45 水田遺構 (1357-OZ、1000-OZ)
- 図版46 沼・不明遺構 (1205-OX、1207-OX、1209-OX、1605-OL)
- 図版47 出土遺物 (919-OD、506-OD)
- 図版48 出土遺物 (1368-OD)
- 図版49 出土遺物 (1370-OD)
- 図版50 出土遺物 (1370-OD)
- 図版51 出土遺物 (1370-OD)
- 図版52 出土遺物 (1384-OD)
- 図版53 出土遺物 (1367・1375-OD、521-OO)
- 図版54 出土遺物 (521-OO)
- 図版55 出土遺物 (507-OO、1364-OO)
- 図版56 出土遺物 (1364-OO)
- 図版57 出土遺物 (1379-OO)
- 図版58 出土遺物 (1366・1372・1378・1385-OO、503-OO)
- 図版59 出土遺物 (501-OR)
- 図版60 出土遺物 (501-OR)
- 図版61 出土遺物 (501-OR)
- 図版62 出土遺物 (501-OR)
- 図版63 出土遺物 (501-OR)
- 図版64 出土遺物 (924・925-OI)
- 図版65 出土遺物 (1360・502-OR)
- 図版66 出土遺物 (922-OR)
- 図版67 出土遺物 (922-OR)
- 図版68 出土遺物 (922-OR)
- 図版69 出土遺物 (926-OR)
- 図版70 出土遺物 (926-OR)
- 図版71 出土遺物 (1641-OR)
- 図版72 出土遺物 (533-OX)
- 図版73 出土遺物 (533-OX)

- 図版74 出土遺物 (533-O X)
 図版75 出土遺物 (533-O X)
 図版76 出土遺物 (533-O X)
 図版77 出土遺物 (533-O X)
 図版78 出土遺物 (533-O X)
 図版79 出土遺物 (533-O X)
 図版80 出土遺物 (533-O X)
 図版81 出土遺物 (533-O X)
 図版82 出土遺物 (533-O X)
 図版83 出土遺物 (914・915・916-O B、1273-O B)
 図版84 出土遺物 (915・1273-O B、1436・1110・1223・1096・1123-O P)
 図版85 出土遺物 (1007・1021・1150・1160-O O)
 図版86 出土遺物 (1001・1014・1015・1057・1073・1149・1154・1159・1208・1210・1270・1443・1618-O O)
 図版87 出土遺物 (1160・1200・1201-O O)
 図版88 出土遺物 (1151・1204・1221・1236-OW、1148・1215・1220-OW)
 図版89 出土遺物 (1251・1295-OW、1003・1012・1013-O S)
 図版90 出土遺物 (1002・1006・1012・1017・1018・1233-O S、1632・1636-O S)
 図版91 出土遺物 (1041・1216-O S、1216・1219-O S)
 図版92 出土遺物 (1207-O X)
 図版93 出土遺物 (1209-O X、1605-O L、1000-O Z)
 図版94 出土遺物 (IV・V区包含層)
 図版95 出土遺物 (II・III・IV区包含層、V区包含層)
 図版96 出土遺物 (1209-O X、1605-O L、V区包含層、III区包含層、1251-OW、1000-O Z)

表 目 次

ピット法量表	111
--------------	-----

第 I 章 経 過

第 1 節 既往の調査

西大路遺跡は玉谷哲氏によって採集された須恵器蓋杯、土師器高杯が、1976年に岸和田市市史編纂事業の一環として刊行された、「市内出土遺物図録」¹の中に記載されたことによって、遺跡として認識されるようになった。²

しかし本格的な発掘調査は、1974年度に都市計画道路府道磯之上山直線の建設予定にともない大阪府教育委員会が実施した第 1 次調査³を待たなければならない。

この調査の結果、弥生土器、土師器、須恵器、瓦などを含む遺物包含層が確認され、豊富な遺物とともに遺構の存在する可能性の大きい弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが改めて確認された。さらに遺跡の範囲も西は府道大阪和泉南線から東は牛滝川の左岸までと確定した。

そして1986年度には（財）大阪府埋蔵文化財協会によって遺跡の東端部分の牛滝川に隣接した部分と西端の府道大阪和泉南線に隣接した部分の発掘調査が実施された。⁴東端部分の調査では建物の柱跡と想定される遺構等が多数検出され、中世における集落の一端を明らかにした。西端部分の調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての自然河川が検出され、多量の遺物が出土した。

しかし1986年度までに実施された発掘調査では本遺跡のごく一部にトレンチを入れたにすぎず、遺跡の性格を具体的に把握するまでには至っていない。

今回の調査は府道大阪和泉南線から牛滝川に至る約500mを実施し、今後に多くの課題を残しながらも遺跡の性格付けに迫る成果をあげたと言えよう。

第 2 節 調査に至る経過

1980年代に入り関西国際新空港の構想が具体化し、それに伴い近畿自動車道と歌山線建設の促進といった動きの中で、都市計画道路府道磯之上山直線の建設も具体的な日程にのることとなった。

このような状況を踏まえ、同計画道路内の遺跡の有無について早急な見直しが必要であるとの判断から、大阪府教育委員会では同計画路線内の分布調査を1983年に実施した。更に1984年から85年にかけて分布調査の結果を踏まえて第1次調査が実施された。その結果、大阪府教育委員会では遺構・遺物が確認された地域については、道路建設に先立って全面発掘調査が必要と判断を下し、その旨、大阪府土木部へ通知するとともに、発掘調査の取り扱いについて協議に入った。

協議を重ねた結果、都市計画道路府道磯之上山直線建設工事が関西新空港関連事業であることも鑑み、発掘調査は当財団法人大阪府埋蔵文化財協会に委託されることとなった。これに基づき本協会は、1986年4月1日付けをもって大阪府土木部との間に、西大路遺跡の発掘調査に関する委託契約を締結した。

現地発掘調査は、1986年5月24日に着手し、1987年3月28日に終了した。

遺物整理は、1987年4月1日に着手し、1988年3月31日に西大路遺跡発掘調査報告書の刊行をもって終了した。

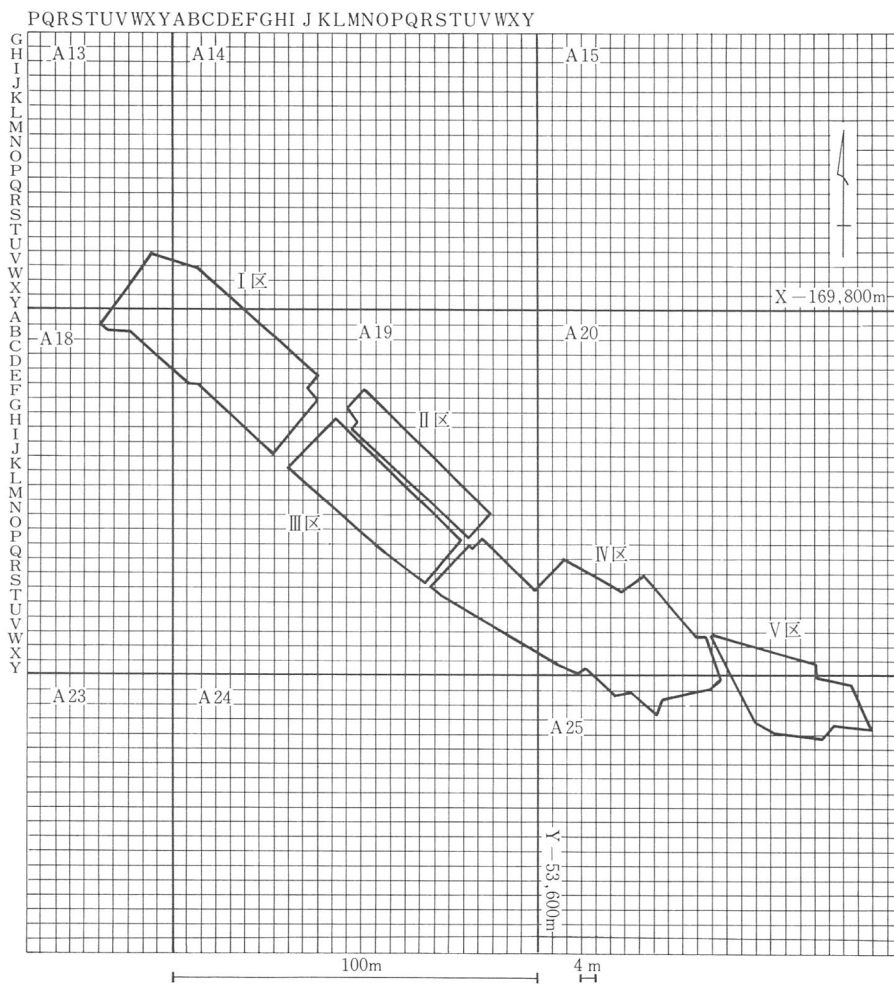
第3節 調査の方法

調査区の地区割り、各地区の名称、遺構番号、遺構の略称、遺物登録番号、土層の記録等々の調査の基本に関わる作業は全て当財団法人大阪府埋蔵文化財協会の定める発掘調査規程によっている。ただし、調査区が里道・市道・水路等によって大きく5ヶ所に分かれているため、便宜上、この5分割された各地区を西から東に向かって順にI～V区と仮称している。また、この仮地区は本文中においても、必要に応じて使用しているところがある。

調査区は、大阪府発行新版(昭和59年建設省国土地理院承認)の1/2,500の地形図のD-4-13に位置する(第4図)。100×100m、4×4m区画の各地区及びI～V区の位置関係は第1図に示す通りである。

尚、出土遺物の取り上げは、4×4mの区画で行なった。

- 註1 岸和田市『市内出土遺物図録』玉谷哲所蔵資料 1976
- 2 大阪府教育委員会『三田遺跡試掘調査概要』1985・3
- 3 大阪府教育委員会『今木麿寺跡発掘調査概要』1985・3
- 4 (財)大阪府埋蔵文化財協会『西大路遺跡・今木麿寺遺跡』一発掘調査事業報告書一 1985



第1図 地区割模式図

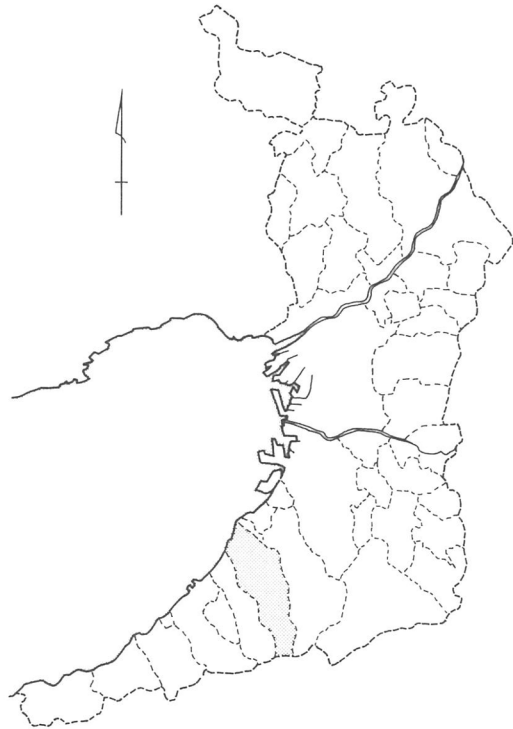
第II章 位置と環境

第1節 西大路遺跡の位置と微地形（第2～5図）

西大路遺跡は大阪府岸和田市西大路町111番地付近一帯に広がる、弥生時代から中世の複合遺跡である。岸和田市は南北に弓状に細長くのびる泉州地域のほぼ中央にあり、西大路遺跡の所在する岸和田市西大路は市の北東部にあたり和泉市との市境に近い。付近一帯は牛滝川の氾濫原が畑地あるいは水田として利用されているほかは宅地化している。遺跡の範囲は必ずしも明確でなく、西限を府道大阪和泉南線（旧国道13号線）付近、東限を牛滝川としている。現地表面の高さは標高（T.P.）約20mを測り、牛滝川の両側の氾濫原部分がやや低いのを除くと、基本的には東から西に向かってゆるやかに傾斜している。

第2節 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境 泉州地域の基本的な地理的環境は海岸線に沿って帯状にのびる砂堆が発達している。その背後に段丘がせまっている。そして部分的には砂堆と段丘崖との間に後背湿地が見られる。さらに段丘の背後には和泉山脈が南北に連なっている。和泉山脈に源を持つ代表的な河川は、北から堺市を流れる石津川、忠岡町を流れる大津川、岸和田市を流れる春木川、貝塚市を流れる津田川、近木川、見出川、泉佐野市を流れる佐野川、泉南市を流れる檜井川、男里川がある。それぞれの河川は細長い泉州地域を分断するかにように大阪湾に注いでいる。西



第2図 岸和田市位置図

大路遺跡の東端を流れる牛滝川は大津川に注ぐ支流にあたる。

西大路遺跡は牛滝川とその南部を流れる天の川によって形成された沖積段丘面および氾濫原上に立地しており、現地形は先にも述べたようにゆるやかな傾斜をもちながらも安定したほぼ平坦面となっている。

2. 歴史的環境 近年の府道建設に伴い牛滝川流域における発掘調査が増加し岸和田市内における歴史的な環境が徐々にではあるが明らかになりつつある。本稿では西大路遺跡周辺特に牛滝川流域を中心に述べることにする。

旧石器時代は、岸和田市内では国府型ナイフが西山遺跡¹、琴山遺跡²、葛城山頂遺跡³、有舌尖頭器は下池田遺跡⁴で出土例が報じられているが、プライマリーな状態で遺物や遺構が検出されている遺跡は現在のところ確認されていない。

縄文時代になると岸和田市内においては、中期後半の段階で海岸に近い所に春木八幡山遺跡⁵が出現する。後期になると西大路遺跡の西側に隣接する箕土路遺跡⁶、さらに牛滝川流域で山ノ内遺跡⁷が新たに出現する。

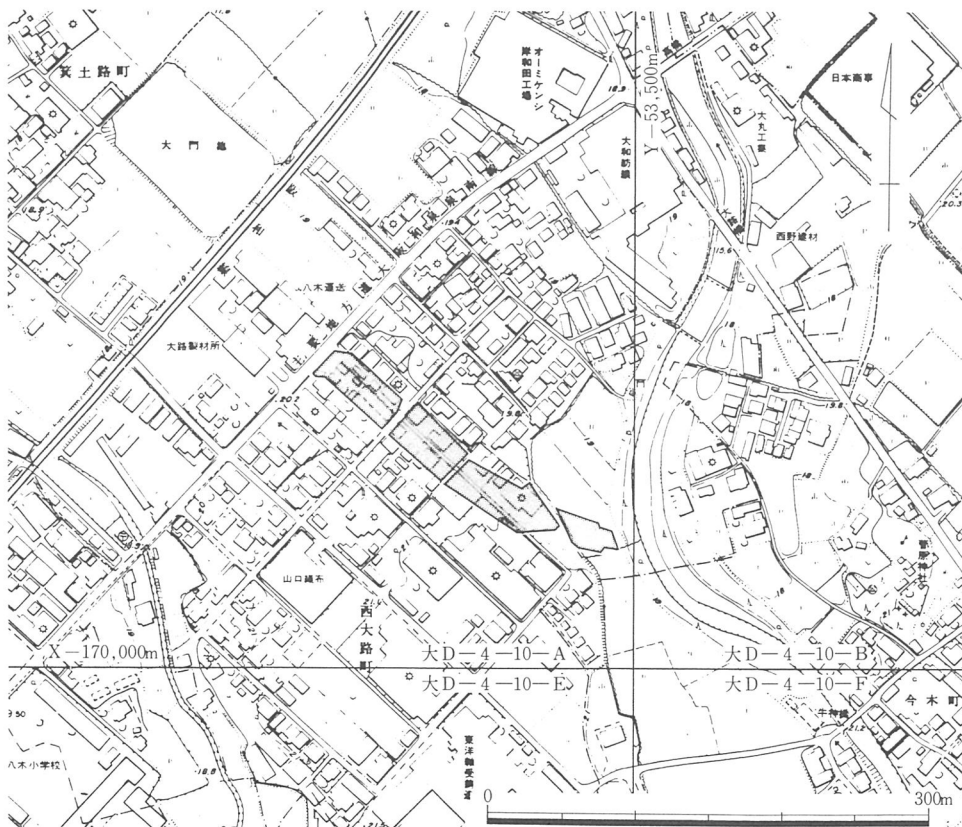
弥生時代前期になると縄文時代から続く春木八幡山遺跡に加えて砂堆上に加守三昧山遺



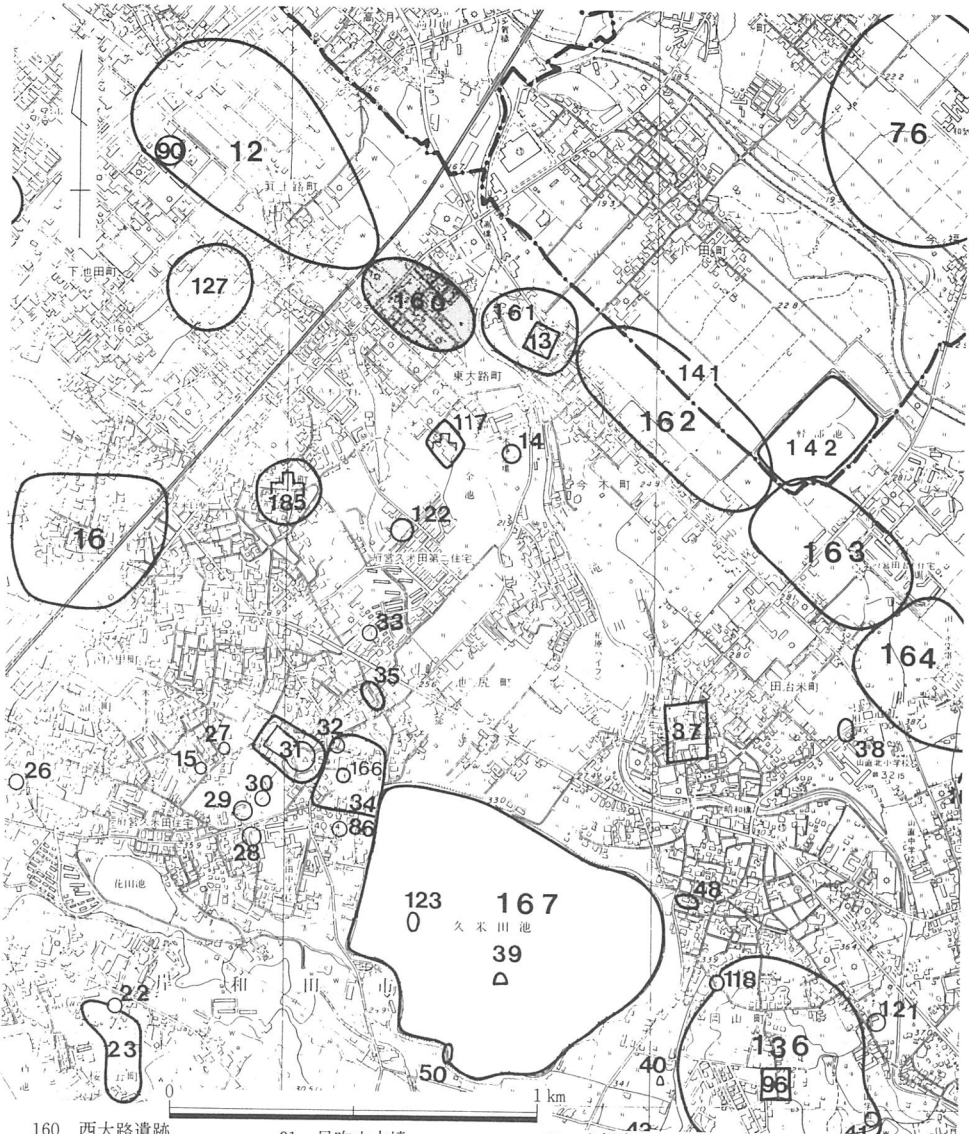
第3図 岸和田市付近地質図

跡⁸が認められ、内陸部に入ると田治米宮内遺跡⁹が加わる。しかし、泉州地域の中でも石津川流域¹⁰や榎井川流域¹¹では、近年の発掘調査によって縄文時代から弥生時代の移行期にかかわる遺跡が明らかにされつつあるが、当地域でのこの時期の遺跡は現段階では認められず、今後の課題となっている。中期になると牛滝川流域に山ノ内遺跡¹²、天の川流域に下池田遺跡¹³、春木川流域に栄の池遺跡¹⁴、津田川流域に畑遺跡¹⁵が新たに出現するほか、前段階より続く春木八幡山遺跡もあり遺跡数は急増する。中期末から後期初頭になると前述の周辺遺跡は消滅および規模が縮小し、平地部の遺跡は減少する傾向が見られ、一方で丘陵部上の従来の遺跡の立地に比較して高所に集落が出現する。尾生丘陵の兒子池東遺跡¹⁶（標高約60m）、上松中尾遺跡¹⁷（標高約50m）、久米田池南方の岡山丘陵のどぞく遺跡¹⁸（標高約60m）がその例に当たると思われる。

弥生時代後期になると、丘陵部の遺跡は消滅し、再び平地部に遺跡が増加する傾向が見られる。西大路遺跡もこの時期に集落としての体裁を整えると言える。特に、後期後半か



第4図 調査区位置図



- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|------------|
| 160 西大路遺跡 | 31 貝吹山古墳 | 90 犬飼堂跡 | 163 山ノ内遺跡 |
| 12 箕土路遺跡 | 32 光明塚古墳 | 96 岡山御坊跡 | 164 山直北遺跡 |
| 13 今木廃寺 | 33 池尻古墳 | 117 今木城跡 | 166 久米田寺境内 |
| 14 丸山古墳 | 34 久米田寺跡 | 118 狐塚古墳 | 167 久米田池 |
| 15 長坂古墳 | 35 池尻町遺跡 | 121 川原古銭出土地 | 185 八木城跡 |
| 16 小松里廃寺 | 37 田治米廃寺 | 122 大町遺跡 | |
| 22 狐塚古墳 | 38 田治米宮内遺跡 | 123 久米田池内遺跡 | |
| 23 狐塚遺跡 | 39 久米田池須恵器窯跡 | 127 下池田遺跡 | |
| 26 浄行寺古墳 | 40 松尾池尻埴輪窯跡 | 136 岡山遺跡 | |
| 27 志阿弥法師塚古墳 | 48 岡山矢取遺跡 | 141 笠松遺跡 | |
| 28 女郎塚古墳 | 50 岡山ハッ川遺跡 | 142 作遺跡 | |
| 29 風吹山古墳 | 76 八代寸廃寺 | 161 今木遺跡 | |
| 30 無名塚古墳 | 86 池尻円筒棺出土地 | 162 軽部池西遺跡 | |

第5図 周辺遺跡分布図

ら古墳時代前期にかけては遺跡数も増加する。周辺地域では、隣接する箕土路遺跡や津田川流域の土生遺跡¹⁹がある。泉州地域全体を見渡すと和泉市の上町遺跡²⁰、府中遺跡²¹、和気遺跡²²、泉大津市の七の坪遺跡²³、豊中遺跡²⁴、古池遺跡²⁵、古池北遺跡²⁶等がある。西大路遺跡をはじめ、これら遺跡では集落の一部が確認されているが、いずれの遺跡も竪穴住居は数棟しか検出されておらず、弥生時代中期末から後期初頭に出現した高地の集落に比して、小規模な集落が点在していたと思われる。また上町遺跡²⁷、豊中遺跡²⁸、古池遺跡²⁹では弥生時代の伝統を強く引く在地産の土器群に共伴して生駒西麓産の「上田町Ⅱ式」の甕が認められるのに対して、西大路遺跡では弥生時代後期からの系譜を引く在地産の土器のみである。この時期には上田町Ⅱ式の土器を共伴する遺跡と在地産の土器のみを使用した遺跡の両者が存在する可能性があり、弥生時代から古墳時代への変換期において注目すべき点と言えよう。古墳時代中期から後期にかけては、比較的規模の大きい集落として畑遺跡³⁰が出現し新たな展開を示すようになる。牛滝川の中流域で山直谷の開口部付近においても山直北遺跡³¹、三田遺跡³²、上フジ遺跡³³、二俣池北遺跡³⁴と遺跡は増加する。古墳は牛滝川流域の東山丘陵の縁辺部に泉州地域最古の前期古墳である摩湯山古墳³⁵（前方後円墳 全長約200m）が築造されており、当古墳の眼下に広がる三田遺跡との関わりが注目されるところである。

歴史時代になると、西大路遺跡は軽部池を境にして和泉郡八木郷に属する。この時期の遺跡としては、奈良時代から平安時代にかけての集落である三田遺跡³⁶、上フジ遺跡³⁷、山直北遺跡³⁸が確認されている。岸和田市内におけるこの時期の寺院は、小松里廃寺³⁹と春木廃寺⁴⁰が7世紀後半に、「行基年譜」によれば久米田寺が8世紀の建立とされているが、実体は不明である。平安時代後期になると、西大路遺跡の東側に隣接して今木廃寺⁴¹が建立される。今回の調査で検出した集落との関係が注目されるところである。

註 1 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979

2 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979

3 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979

4 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979

5 岸和田市教育委員会・古代学協会『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』1965

6 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979

7 本協会調査による。

8 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979

9 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979

10 (財)大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』1984・1985

11 (財)大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1984 P.783参照

12 本協会調査による。

- 13 大谷女子大学資料館『下池田遺跡』-第2次発掘調査報告書-大谷女子大学資料館報告書第十七冊 1987
- 14 岸和田遺跡調査会『柴の池遺跡』1979
- 15 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979 岸和田市教育委員会近藤由利氏の御教示による。
- 16 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979 大阪府教育委員会藤永正明氏の御教示による。
- 17 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979
- 18 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979
- 19 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979
 - 岸和田遺跡調査会『土生遺跡』第2次発掘調査概要 1975・1
 - 岸和田遺跡調査会『土生遺跡』第3次発掘調査概要 1975・3
 - 岸和田市教育委員会『土生遺跡発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要1～4 1976～1979・3
 - 岸和田市教育委員会『土生遺跡他発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要7 1982・3
- 20 和泉市教育委員会『上町遺跡発掘調査概要』1975・3
- 21 大阪府教育委員会『府中遺跡発掘調査概要』1985・3
 - 和泉市教育委員会『府中遺跡発掘調査概要・III・IV』1980・3・9
 - 和泉市教育委員会『府中遺跡群発掘調査概要』1981・3
 - 和泉市教育委員会『府中遺跡群発掘調査概要・II・III・V～VII』1982・1983・1985～1987・3
- 22 大阪府教育委員会『和気遺跡発掘調査概要報告書』1985・3
 - 和気遺跡調査会『和気』和気遺跡発掘調査報告書 1979
 - 和気遺跡調査会『和気II』和気遺跡発掘調査報告書II 1981
- 23 大阪府教育委員会『七の坪遺跡発掘調査概要』1974・3
 - 大阪府教育委員会『七の坪遺跡発掘調査概要・III』1984
- 24 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのIII 1976・3
- 25 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのIII 1976・3
- 26 大阪府教育委員会『古池北遺跡調査概要』1974
 - 大阪府教育委員会『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』1978
- 27 和泉市教育委員会『上町遺跡発掘調査概要』1975・3
- 28 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのIII 1976・3
- 29 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのIII 1976・3
- 30 岸和田市教育委員会近藤由利氏の御教示による。
- 31 本協会調査による。
- 32 本協会調査による。
- 33 本協会調査による。
- 34 本協会調査による。
- 35 岸和田市『岸和田市史』第1巻 1979
- 36 本協会調査による。
- 37 本協会調査による。
- 38 本協会調査による。
- 39 藤澤一夫「攝河泉出土古瓦の研究－編年の様式分類の一試企－」『佛教考古学論叢』考古学評論第三輯 1941
 - 岸和田市教育委員会『昭和58年度発掘調査概要』1984
- 40 藤澤一夫「攝河泉出土古瓦の研究－編年の様式分類の一試企－」『佛教考古学論叢』考古学評論第三輯 1941
- 41 大阪府教育委員会『今木廃寺跡発掘調査概要』1985・5

第Ⅲ章 調査成果

第1節 基本層序

本調査区における層序はⅠ～Ⅴ区の各地区を通して一様ではないが、ほぼ共通して認められるものは、最終遺構面に達するまでに盛土層を除く4層に大きく分層できる。最終遺構面以下の層序については基本的な4層の説明のあと各地区別に記述する。

第0層 現代の宅地、工場用地等の整地土（盛土）層で、調査区全体に0.3～1mある。

第1層 第0層直下にある旧耕土層である。調査区全体にあり、褐灰色シルト層あるいは黒褐色シルト層である。10～25cmの厚みで、ほぼ水平に堆積する。その上面の高さはそれぞれの地区ごとによって異なり、Ⅲ区とⅣ区北西半部が高く約T.P.+19.1m、Ⅰ区では低くおよそT.P.+18.6mである。一方、Ⅴ区では牛滝川の氾濫原との境に当たるためか、約1mの落差をもって下がり、約T.P.+18.2mである。

第2層 Ⅰ区とⅢ～Ⅴ区において部分的に認められる土層で、各区において色調等の特徴が若干異なる。Ⅰ区においては、主に501-ORの上部に認められ、にぶい褐色シルト層、にぶい黄橙色シルト層、橙色シルト層、黄橙色シルト層等からなる。厚さは約15cmである。Ⅲ区では北西半部に認められ、にぶい黄橙色シルト層、灰オリーブ色シルト層からなる。層の厚さは10～15cmで、ほぼ水平に堆積する。Ⅳ区では北西半部にあるが、南東半部は削平されたためか認められない。北西半部では主に922-ORと926-ORの上層部分に認められ、褐色粘土層、灰黄褐色シルト層、褐灰色粘土層からなる。厚さは約10cmで、ほぼ水平に堆積する。Ⅴ区においては全面に認められ、明黄褐色シルト層、にぶい黄褐色シルト層からなる。厚さは約10cmで、ほぼ水平に堆積する。

第3層 全区において部分的に認められる土層である。Ⅰ区においては、主に501-ORの上部に認められ、浅黄橙色シルト層である。厚さは最大で約20cmである。Ⅱ区においては、にぶい黄橙色シルト層からなり、厚さは約15cmである。Ⅲ区においては、第2層と同様の地域に認められ、にぶい黄橙色シルト層からなる。厚さは約10cmで、ほぼ水平に堆積する。Ⅳ区においては主に北西端部に認められ、橙色シ

ルト層からなる。厚さは約10 cmである。V区においては、南西半部では第3層に相当するものではなく、主に北東半部にある1647-ORの上部に認められる。土層はにぶい黄褐色シルト層、明褐色シルト層からなり、厚さは約5 cmである。上面の高さはT.P. +17.8~18.0mを測り、溝や土坑を検出する遺構面である。また本土層の直下は掘立柱建物跡や多数のピット等を検出する中世の最終遺構面である。

第4層 I区とII区の922-ORの上部付近からIII区中央付近にかけて認められる。I区では明褐色シルト層からなり、厚さは10~15 cmである。本土層直下は501-OR等を検出する遺構面である。II区からIII区にかけては、にぶい黄褐色シルト層、褐色シルト層からなる。厚さはIII区南東端部に向けて増し、最大で約40 cmである。本土層の直下で1360-ORや1370-OD等を検出する。

I区において検出された501-OR等の遺構の遺構面となっているのは黄褐色シルト層である。本地区では部分的にそれより約1 mまで掘り下げ、上から順に褐色混礫シルト層、黄褐色粘質シルト層、黄灰色粘土層が水平に堆積していることを確認した。

II区においては黄褐色シルト層が遺構面となっており、上面の高さはT.P. +18.7mである。それ以下約1.2m掘り下げ、上から順に明黄褐色シルト層、灰黄色砂質シルト層等が水平に堆積していることを確認した。

III区における遺構面は明黄褐色シルト層であり、それ以下約30 cm掘り下げ、上から順に黄褐色シルト層、褐色シルト層、浅黄色粘質シルト層の堆積を確認した。

IV区において検出した1357-OZや1359-OB等の遺構面は灰黄褐色シルト層、明黄褐色粘質シルト層である。これらは922-ORや926-ORの最上層に堆積する土層である。この層以下約1.2m掘り下げ、上から順に黄褐色シルト層、褐色シルト層、にぶい黄褐色シルト層、にぶい黄褐色粘質シルト層が確認され、922・926-ORのベースとなっている。

V区において検出された中世の最終遺構面は、1647-ORの上部に見られるにぶい黄褐色シルト層、明褐色シルト層等である。これらは、出土遺物等から中世における整地土層と考えられる。厚さは約40cmである。一方1641-ORの上部には灰色砂層の高まりが認められ、この層がそのまま中世の遺構面となっている部分がある。また南東端部においては灰褐色粘土層、褐色粘土層が遺構面で、これらの土層は1641・1647-ORの遺構面でもある。また、これらの土層は今回の調査地全体を眺めた場合最も安定しているように思われるが、洪積段丘に相当するかは不明である。したがって当遺跡における今回の調査地は牛滝川と天の川の旧河川によって形成された河岸段丘上に立地していると考えられる。

19.40m

19.40m



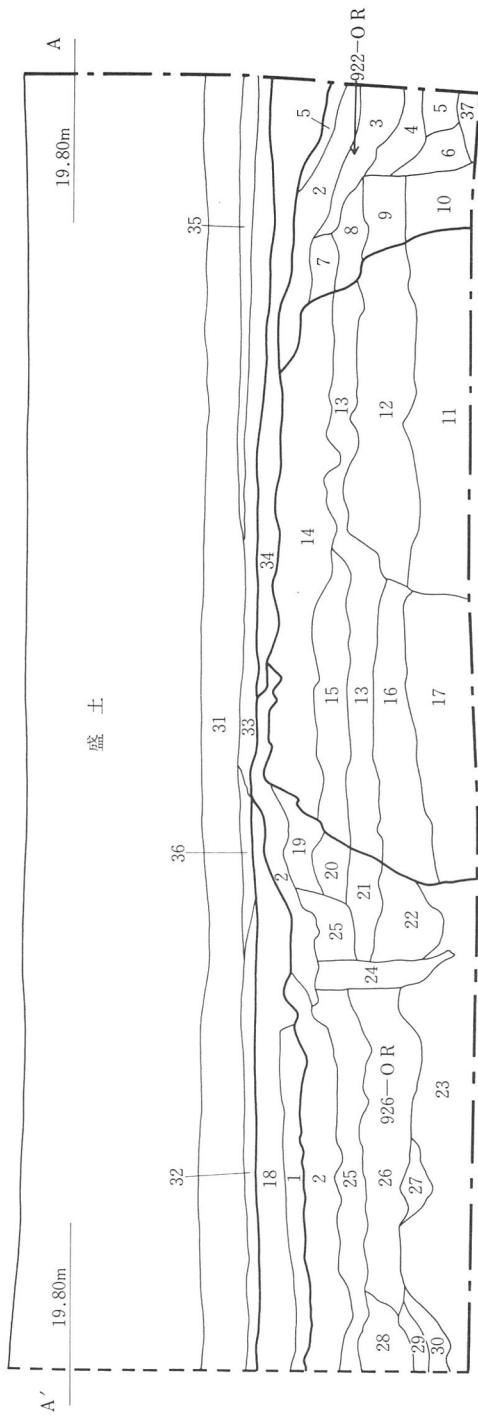
第6図 I区土層図

20.00m

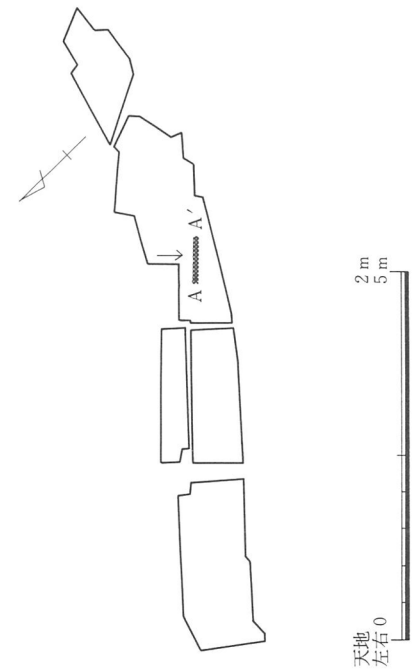
20.00m



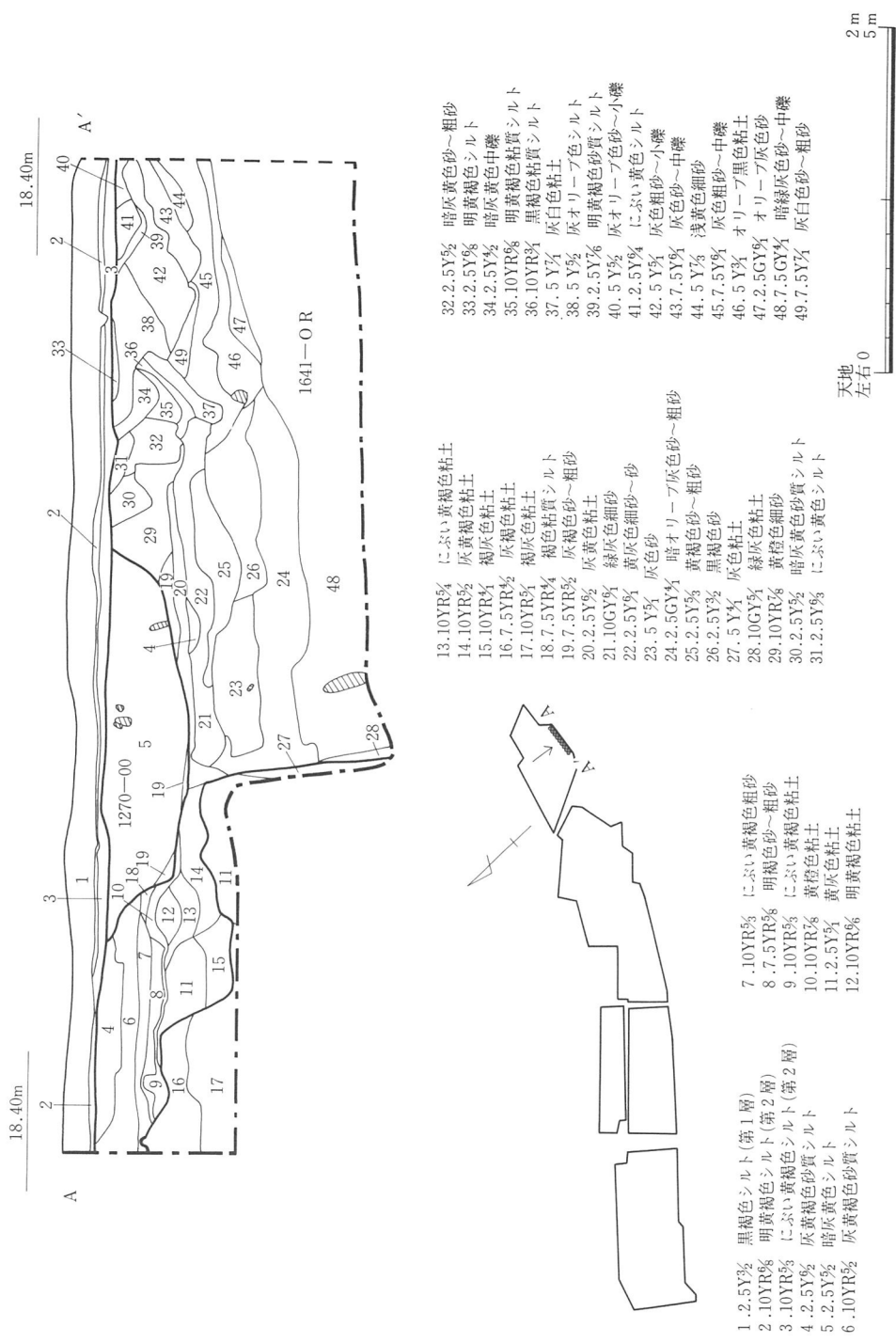
第7図 II区土層図



- 1. 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
- 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
- 4. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト
- 5. 10YR6/1 褐灰色粘質シルト
- 6. 7.5GY6/1 緑灰色粘質シルト(砂混じり)
- 7. 10YR5/6 黄褐色シルト
- 8. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
- 9. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト
- 10. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト
- 11. 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルト
- 12. 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト
- 13. 10YR4/6 褐色シルト
- 14. 10YR5/8 黄褐色シルト
- 15. 10YR4/4 褐色シルト
- 16. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
- 17. 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト
- 18. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト
- 19. 10YR6/8 明黄褐色シルト
- 20. 7.5YR4/4 褐色シルト
- 21. 7.5YR4/6 褐色シルト
- 22. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
- 23. 7.5Y5/2 灰オリーブ色細砂
- 24. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
- 25. 2.5Y6/2 灰黄色シルト
- 26. 5 Y6/2 灰オリーブ色シルト
- 27. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂
- 28. 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト
- 29. 2.5Y7/4 浅黄色砂質シルト
- 30. 2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 31. 10YR3/1 黒褐色シルト(第1層)
- 32. 10YR4/6 褐色粘土(第2層)
- 33. 7.5YR6/6 橙色シルト(第3層)
- 34. 10YR5/2 暗黄褐色粘質シルト(砂ブロック含)
- 35. 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト(第2層)
- 36. 10YR4/1 褐灰色粘土(第2層)
- 37. 10YR5/6 黄褐色粗砂(小礫~中礫混じり)



第8図 IV区土層図



第9図 V区土層図

第2節 弥生時代～奈良時代

1. 竪穴住居 (OD)

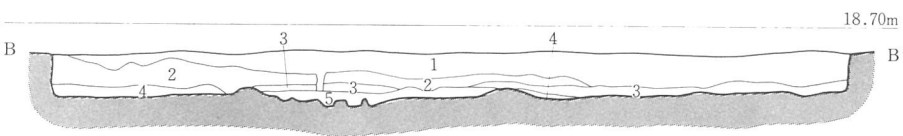
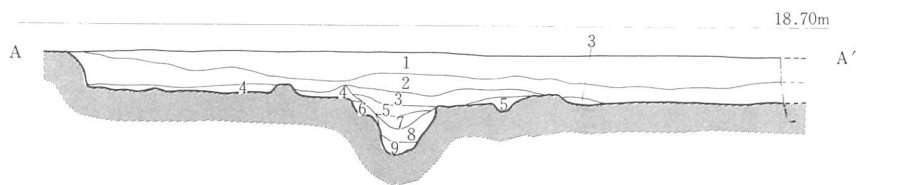
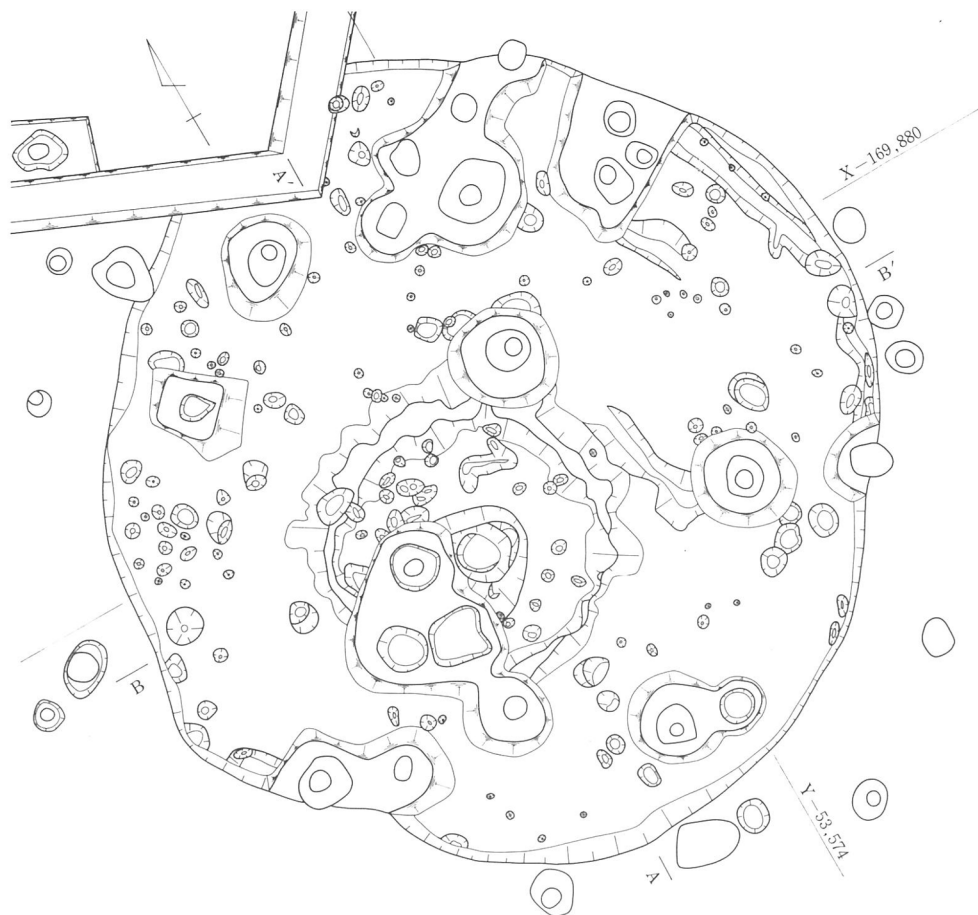
919 (第10・11図; 図版5・6・47) A20UG付近に位置する。直径約6.5m、深さ約35cmの円形プランを呈するものである。埋土は下層からにぶい黄褐色シルト層、褐色シルト層である。張床の痕跡は明瞭ではないが、床面には炉、ピット、壁溝等が認められる。炉は床面中央より、やや南西に寄った所に位置し、直径約1m、深さ約45cmの土坑部分とこれを中心として直径約2.6m、上部幅20～25cm、下部幅30～50cm、高さ8cmの「ドーナツ」状に巡る堤部分とからなる。土坑部分の埋土は下層から黒色粘質シルト層、褐灰色粘質シルト層、明黄褐色粘質シルト層、にぶい黄褐色粘質シルト層である。それらの中には多数の炭が含まれるが、土坑部分の壁面には焼けた痕跡は認められない。堤部分は、一部は黄褐色粘質シルト層の盛土であるが、大半はベース面の削り出しによるものである。その内側には炭層が広がる。ピットは直径10～30cmのものが多数認められる。その内直径25～30cm、深さ15～37cmの5つのピットが柱穴に相当するものと思われる。壁溝は、幅20～30cm、深さ8cmのものを北東部において確認した。

出土遺物は、褐色シルト層から甕37点(1～3)、壺26点(4・7・8)、高杯25点(5・6)、砥石1点(20)、ミニチュア土器1点(15)の他、底部片(9～14・16～19)等が認められる。

506 (第12・13図; 図版7・47) A19GI付近に位置する。付近の遺構との重複関係が著しく規模等は明確でないが、一辺約4m、深さ30cm程度の方形プランを呈すると思われる。主軸はN30°Wを指し、幅10cm程の壁溝が巡る。南辺の中央付近に壁に接して50×20cm、深さ30cmの土坑があり、貯蔵穴と考えられる。柱穴および炉は検出されなかった。埋土は3層に分かれ下層より、灰黄褐色粘質シルト層、褐灰色粘質シルト層、にぶい黄橙色シルト層である。

出土遺物は壺13点(24・25)、甕9点(21～23・26・27)、高杯5点(28)等がある。

1368 (第14・16図; 図版8・9・48) A19JJ付近に位置する。西側の約2/3が調査区外にあるために、平面形は明らかではないが、一辺5.7mの方形プランを呈するものと思われる。主軸はN31°Wを指す。この住居は床面上に多量の炭化した木片を検出した。そのほとんどは「上屋」に使用されていた垂木材と考えられる。垂木材は幅5～15cmで住居の中央に向かって倒れている。また壁直下には幅約10cm、深さ約5cmの壁溝が部分的に認め

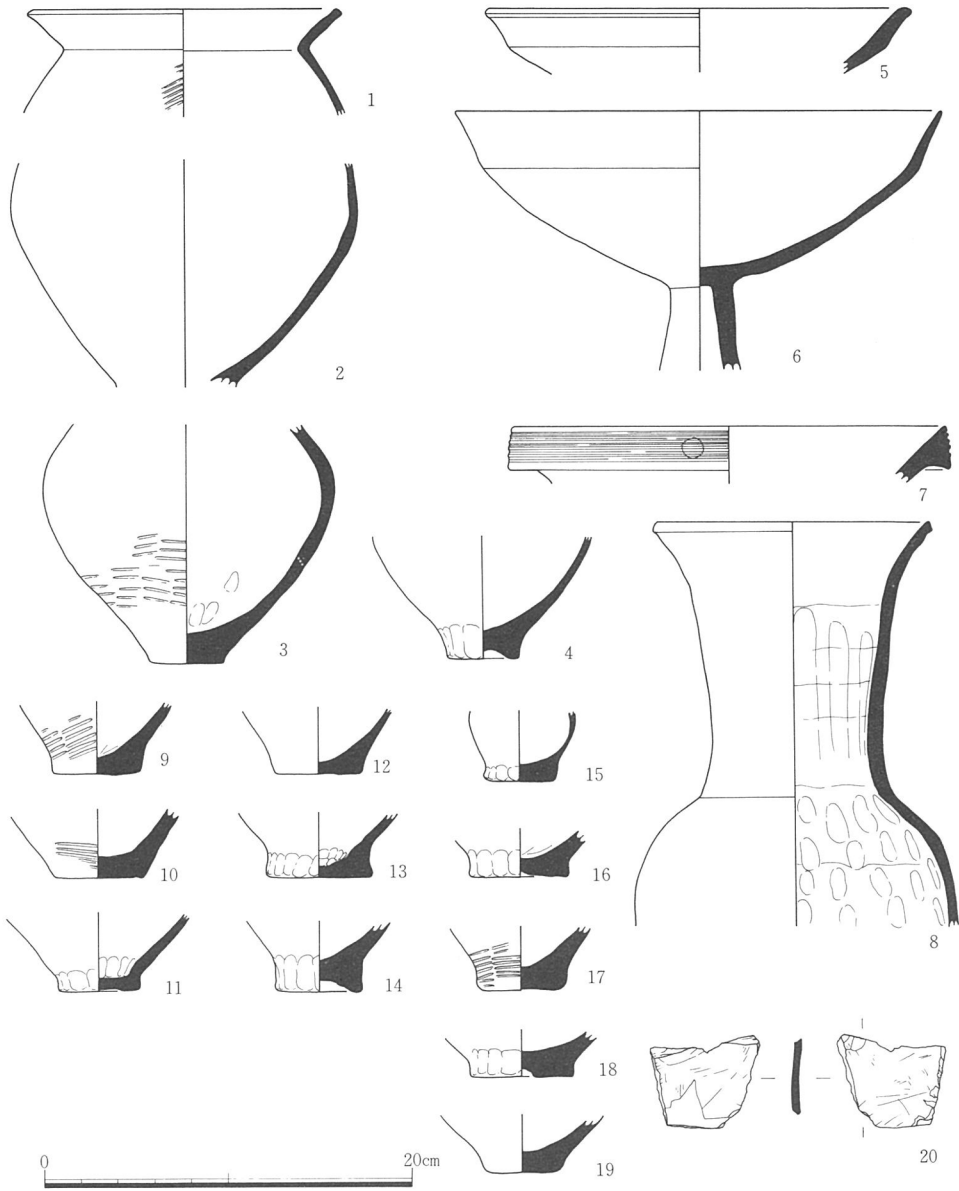


- 1. 7.5Y R4/4 褐色シルト
- 2. 10Y R4/6 褐色シルト
- 3. 10Y R5/4 にぶい黄褐色シルト
- 4. 10Y R4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
- 5. 10Y R4/3 にぶい黄褐色粘質シルト(炭混じり)

- 6. 10Y R5/6 黄褐色粘質シルト混じり
10Y R4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
- 7. 10Y R6/6 明黄褐色粘質シルト
- 8. 10Y R4/1 褐灰色粘質シルト
- 9. 5 Y2/1 黒色粘質シルト

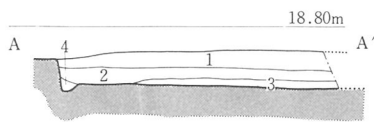
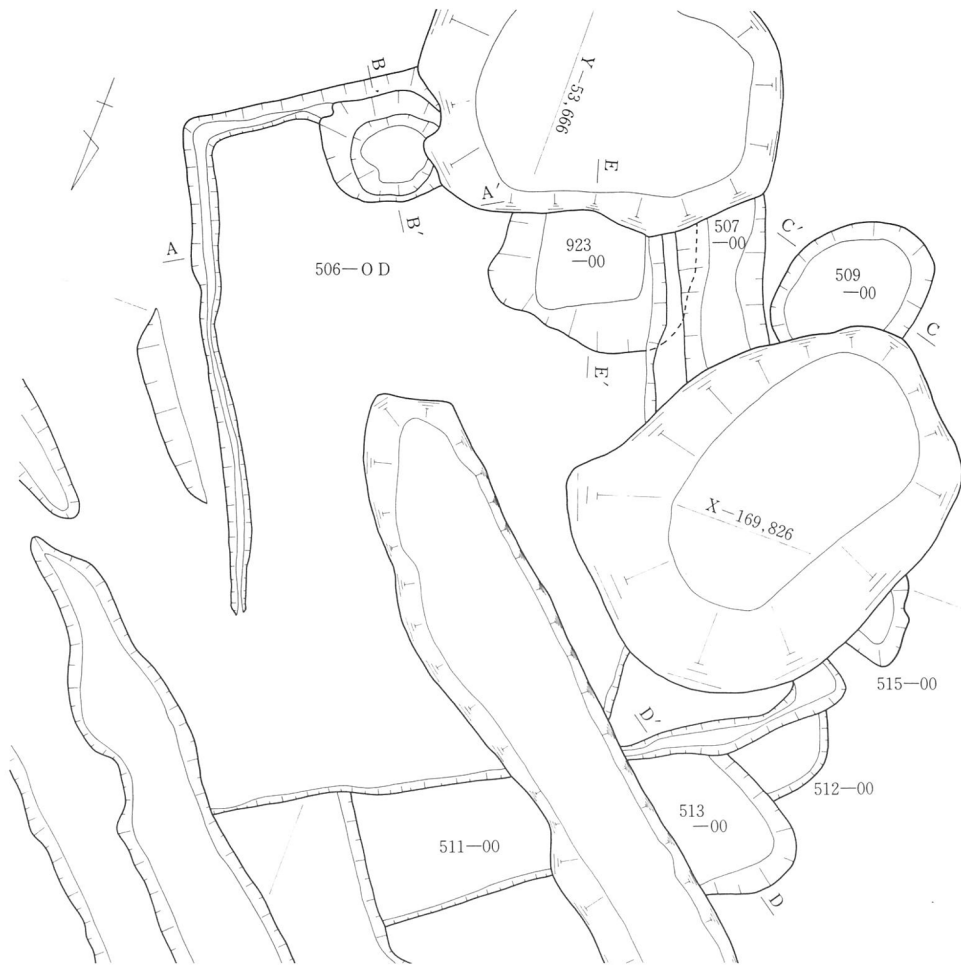


第10図 919-OD 平・断面図

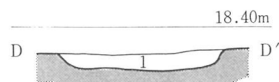


第11図 919-OD 遺物図

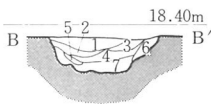
られるが、埋土には炭化した木片が多量に含まれており、壁板が存在した可能性もある。住居の埋土は大きく3層に分かれる。最下層の黄褐色系のシルト層は住居のベース面直上に認められ、その上層に多量の炭化した木片を含む層が堆積していることから床（張床）を形成する土層と考えられる。最上層の褐色粘質シルト層は木片を含む層の上部にあり「上屋」が焼け落ちた後堆積したものである。



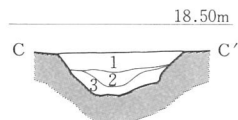
1. 10Y R $\frac{5}{2}$ にぶい黄橙色シルト
2. 10Y R $\frac{5}{2}$ 褐灰色粘質シルト
3. 10Y R $\frac{5}{2}$ 灰黄褐色粘質シルト
4. 5 Y $\frac{5}{2}$ 灰色粘質シルト



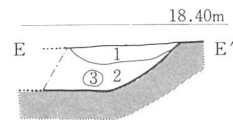
1. 10Y R $\frac{5}{2}$ にぶい黄橙色粘土



1. 10Y R $\frac{5}{2}$ 灰黄褐色粘土
2. 7.5Y R $\frac{5}{2}$ 黒褐色粘土(焼土)
3. 10Y R $\frac{5}{2}$ 灰黄褐色粘土
4. 10Y R $\frac{5}{2}$ 褐灰色粘土
5. 7.5Y R $\frac{5}{2}$ 褐灰色粘土
6. 5 Y R $\frac{5}{2}$ 灰色粘土
7. 10Y R $\frac{5}{2}$ 褐灰色粘土



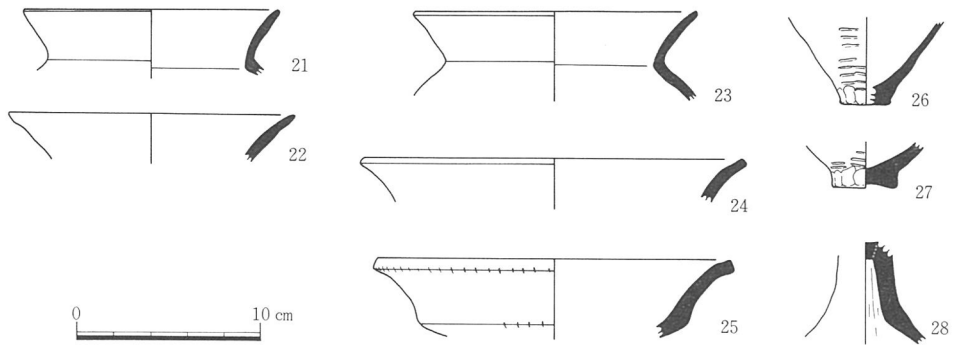
1. 7.5Y R $\frac{5}{2}$ 橙色シルト
2. 10Y R $\frac{5}{2}$ 黄褐色粘質シルト
3. 10Y R $\frac{5}{2}$ 明黄褐色粘質シルト



1. 10Y R $\frac{5}{2}$ にぶい黄橙色粘土
2. 10Y R $\frac{5}{2}$ 褐灰色粘土
3. 10Y R $\frac{5}{2}$ 灰黄褐色粘土



第12図 506-O D 507・509・511~513・515・923-O O 平・断面図



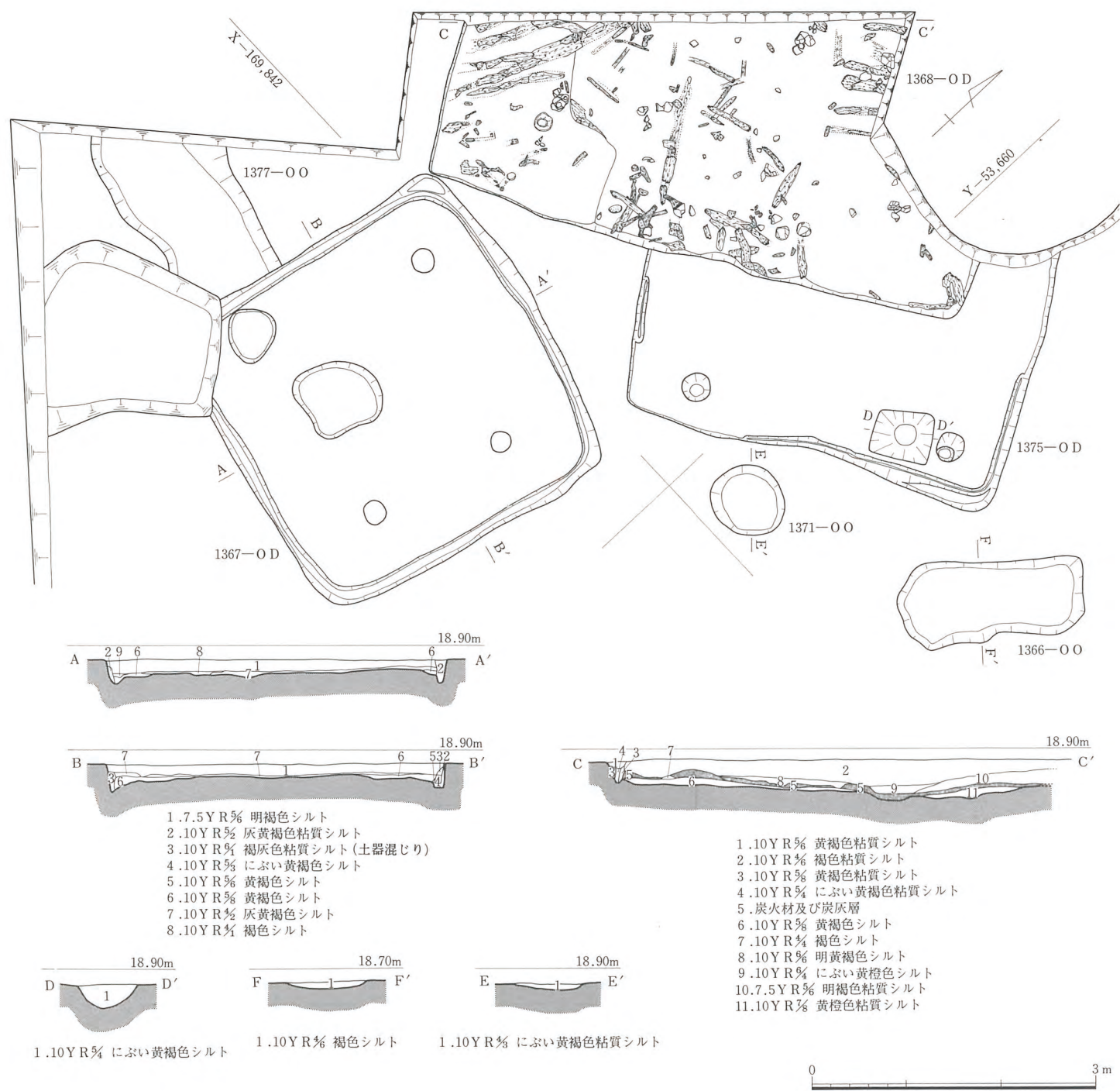
第13図 506-O D 遺物図

出土遺物は、壺6点(40・41・43~46)、甕11点(29~38)、高杯7点(42)、ミニチュア土器底部片(39)等がある。これらの遺物はすべて炭化した木片等を含む層から出土したもので、最上層にはほとんど認められなかった。

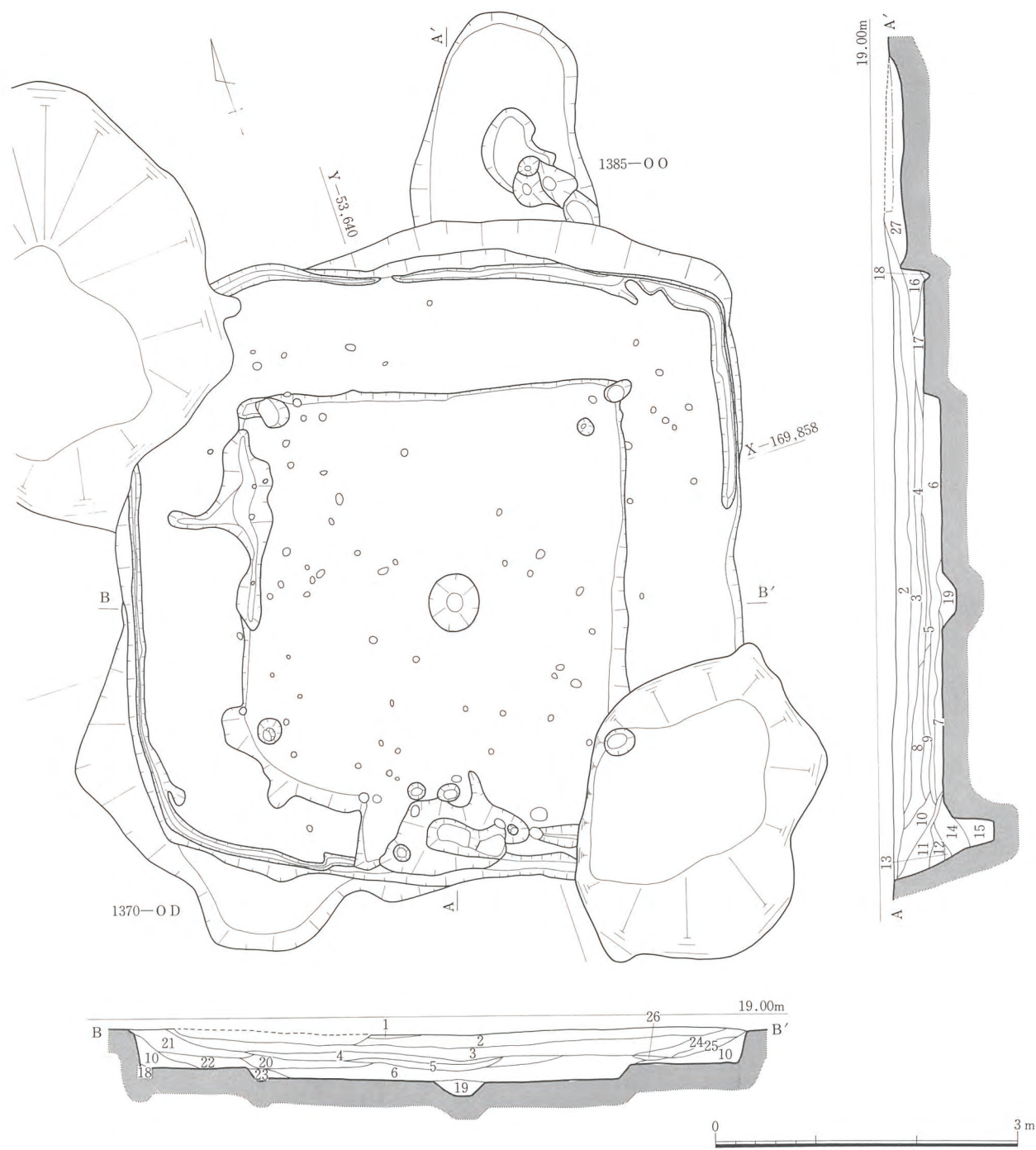
1370(第15・17~19図; 図版10・11・49~51) A19O付近に位置する。南北6.3m、東西6.05mの方形プランのもので、主軸はN17°Eを指し、壁直下に幅約10cm、深さ約5cmの壁溝が巡る。柱穴は四ヶ所あり、いずれも直径30cm程度、深さ20~30cmである。柱穴間の距離は南北、東西ともに3.4mである。南辺の中央付近には、壁に接して平面形が長方形に近い不定形をした60×80cm、深さ約50cmの土坑があり、貯蔵穴と考えられる。さらに、貯蔵穴付近を除いては壁際に幅約1m、高さ約10cm地山を整形した「ベッド」状の台部がある。炉は住居のほぼ中央にあり、直径50cmの円形を呈し、深さ約10cmで浅く、炉の南側の上部に赤く焼けた痕跡がある。灰および炭化物は認められない。埋土の堆積状況から壁付近および貯蔵穴が先に埋没したと思われる。また貯蔵穴の直上付近に堆積した12~14層には、完形品に近い土器が比較的集中して認められた。住居北東部で1385-O Oを切っている。

出土遺物は、比較的多く、壺9点(64)、甕23点(55~63)、高杯17点(82~89)、鉢7点(90~93)、製塩土器3点(94~96)、底部17点(65~81)である。甕は外面にタタキ目を残し、内面の調整はナデである。大半のものは最大径を体部にもつが、60は口径が最大径である。高杯は杯部下半に段をもつものと椀型の杯部の2種が見られる。脚部は87は高く、89は低い。93は外面にタタキ目を残し、内面はヘラミガキ、器壁は非常に薄く仕上げられている。

1375(第14・16図; 図版8・53) A19JK付近に位置する。約半分を1368-O Dと攪乱土坑に切られているため全容は明らかではないが、一辺4mの方形プランを呈すると思

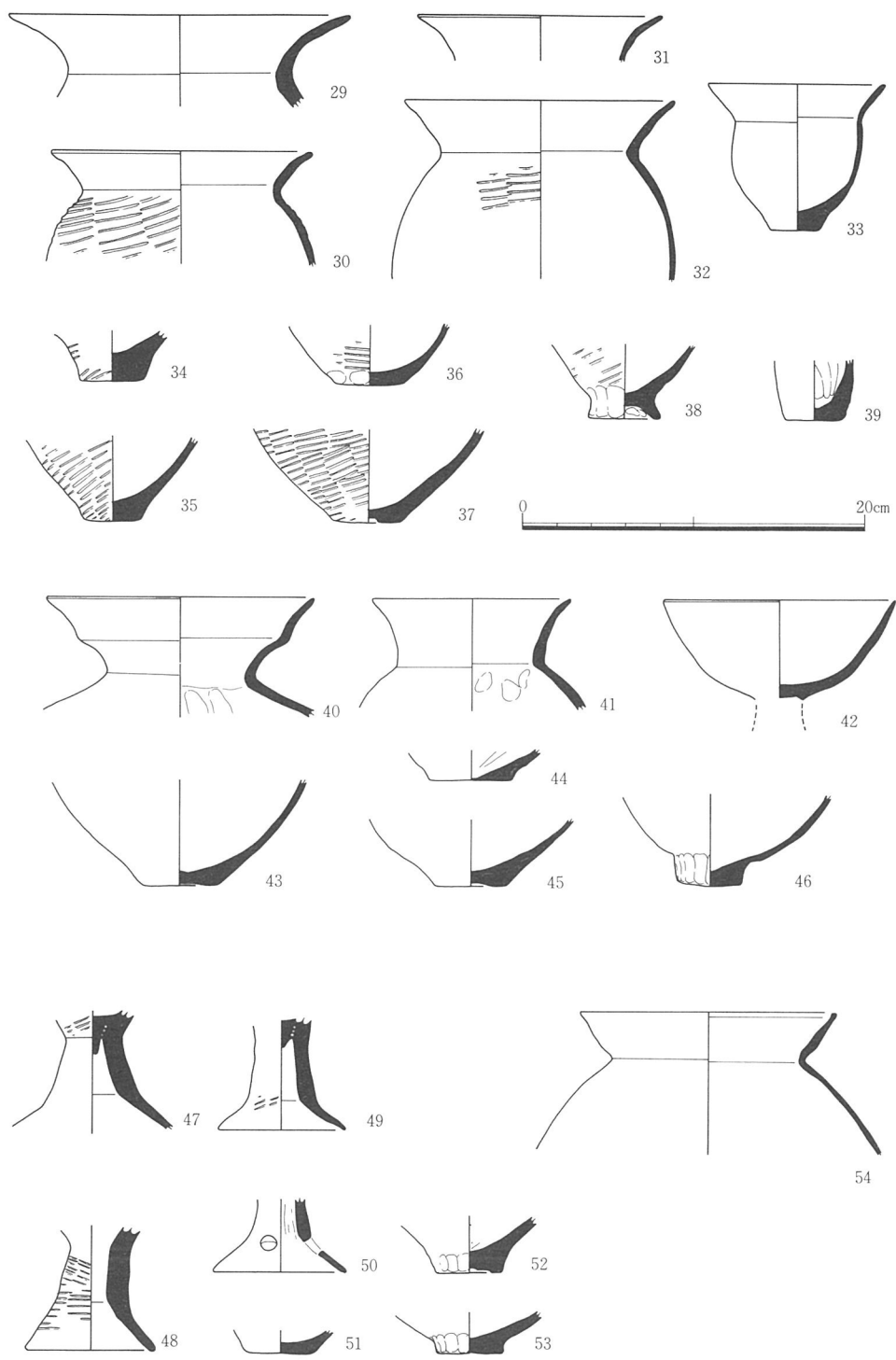


第14図 1367・1368・1375-O D、1366・1371・1377-O O 平・断面図 (1/60)

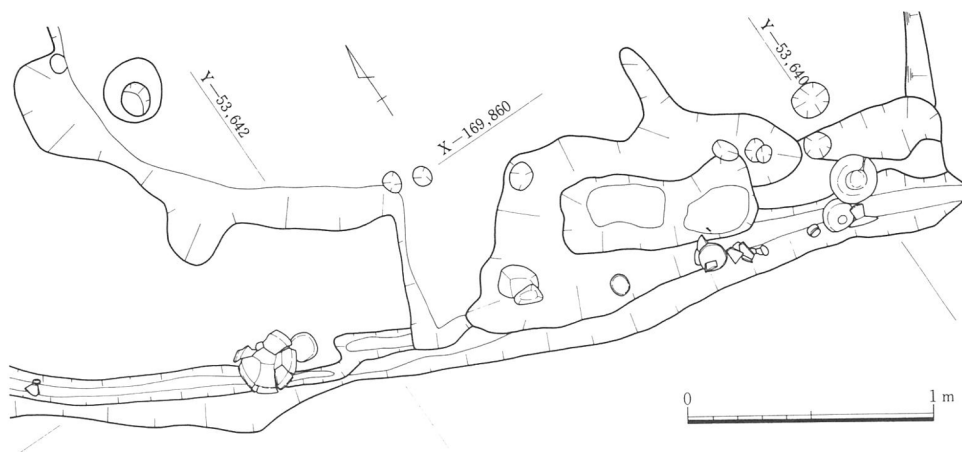


- | | | |
|---------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. 10YR5% 黄褐色砂質シルト | 10. 10YR% におい黄褐色粘質シルト | 19. 10YR% 黒褐色シルト |
| 2. 10YR5% 褐色シルト | 11. 10YR5% 黄褐色シルト | 20. 7.5YR4% 褐灰色粘質シルト |
| 3. 10YR% 褐色シルト | 12. 10YR% 褐色シルト | 21. 10YR% 黄褐色シルト |
| 4. 7.5YR4% 褐色シルト | 13. 10YR% 灰黄褐色シルト | 22. 7.5YR4% 暗褐色シルト |
| 5. 10YR5% 灰黄褐色粘質シルト | 14. 10YR4% 褐灰色粘質シルト | 23. 7.5YR4% 褐色粘質シルト |
| 6. 10YR4% 褐灰色粘土 | 15. 2.5Y4% 黄灰色粘土 | 24. 10YR4% 暗褐色粘質シルト |
| 7. 10YR4% 黒褐色粘土 | 16. 10YR% 明黄褐色粘土 | 25. 10YR% 褐色粘質シルト |
| 8. 5YR3% 暗赤褐色粘質シルト | 17. 5YR4% におい赤褐色粘質シルト | 26. 10YR% 灰黄褐色粘土 |
| 9. 5YR% 赤褐色粘質シルト | 18. 7.5YR% 明褐色粘質シルト | 27. 10YR% におい黄褐色シルト |

第15図 1370-O D、1385-O O 平・断面図 (1/60)



第16图 1367・1368・1375-O D 遺物図



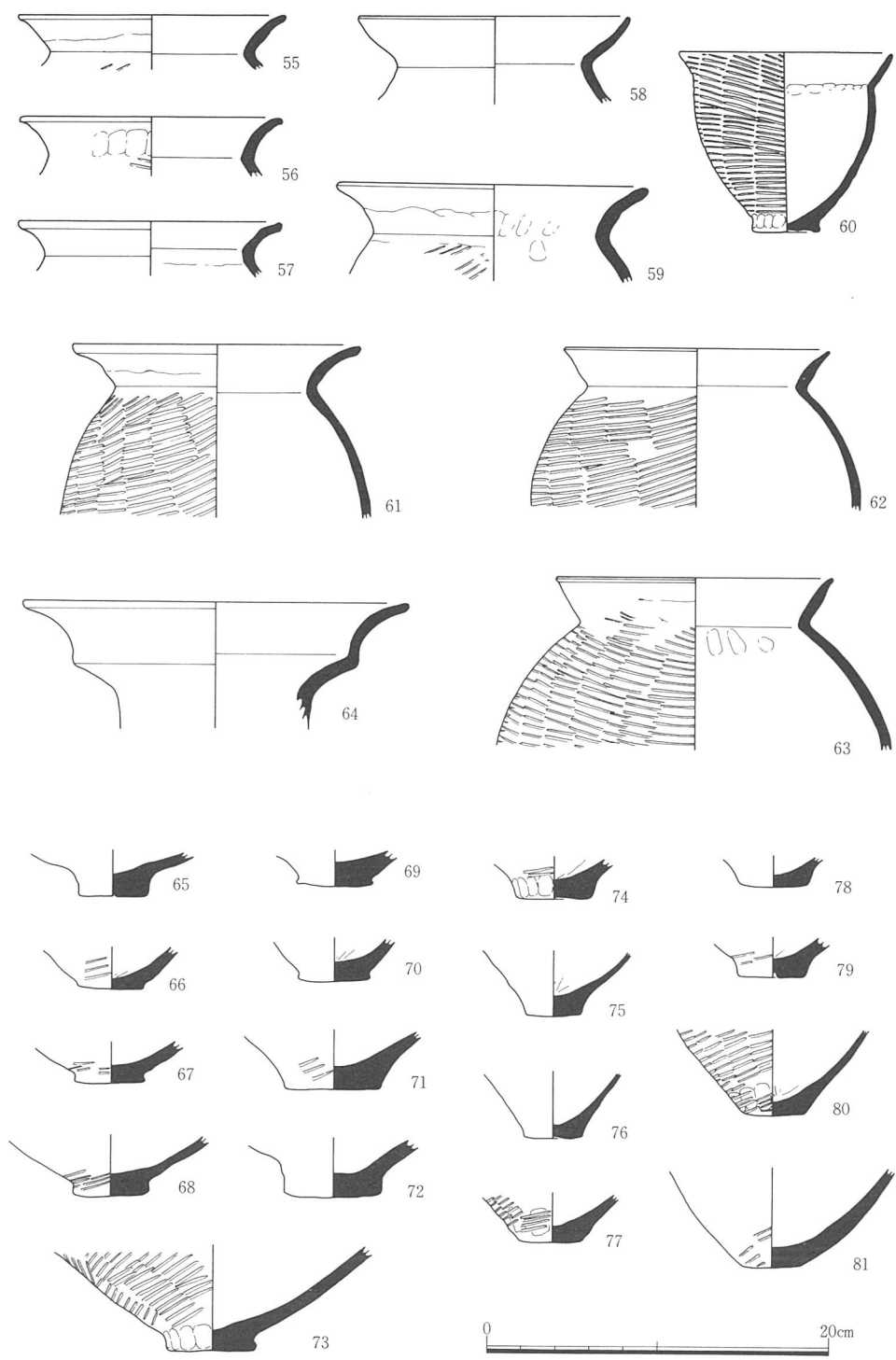
第17図 1370-OD 遺物出土状況図

われる。主軸はN32°Wを指し、1368-ODとほぼ等しい。西隅付近と南辺の一部の壁直下に幅約10~15cm、深さ約5cmの壁溝が巡る。柱穴は二ヶ所検出されており、いずれも直径30cm程度、深さ約30cmである。柱穴間の距離は2.7mである。南辺のやや西よりは、平面形が長方形を呈する65×50cm、深さ約25cmの土坑があり、貯蔵穴と考えられる。

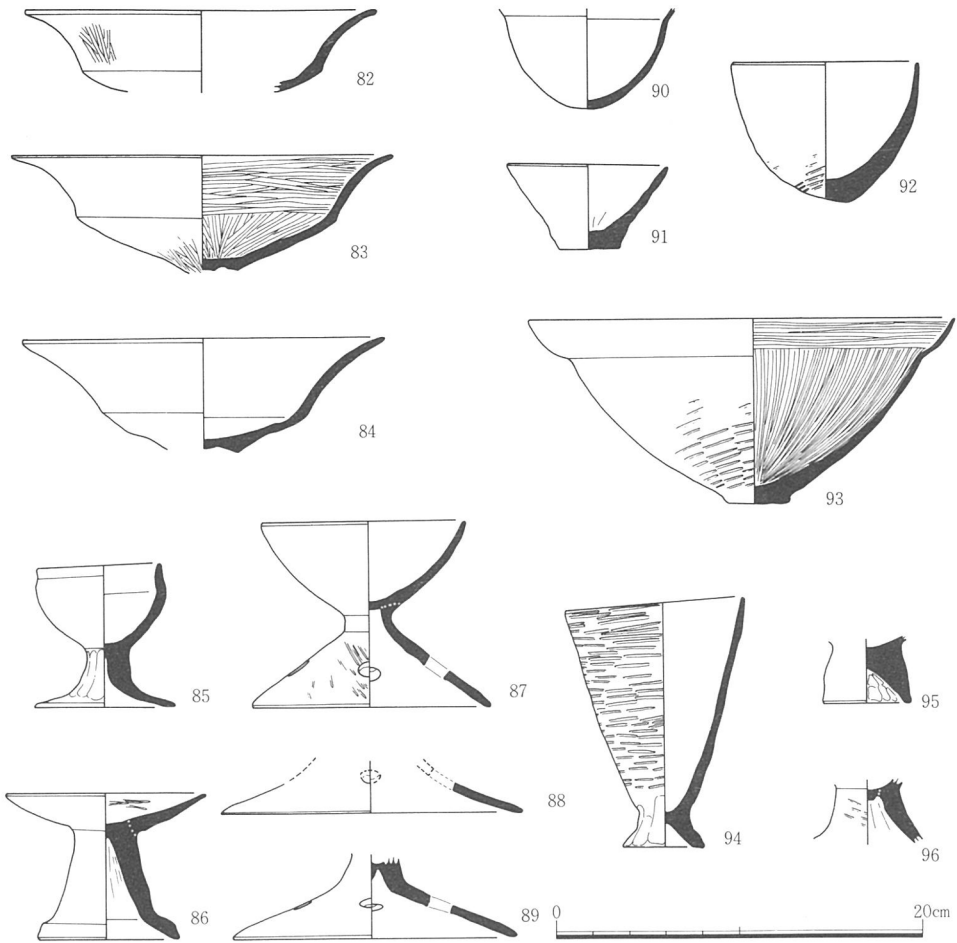
出土遺物は壺2点、甕3点、高杯6点(50)、製塩土器脚部片3点(47~49)、底部片4点(51~53)である。また脚部のうち外面にタタキ目を残すものを製塩土器とし、そうでないものを高杯とした。

1380(第120図) A19IKに位置する。III区の北隅で検出したもので、その大半は調査区外にあり、攪乱溝にも切られており全容はほとんど不明である。ただ直角に曲がる角を持つこと、遺構の壁がほぼ垂直に立ち上がることから竪穴住居の可能性も考えられる。埋土は黄褐色粘質土層である。出土遺物は認められない。

1384(第20・21図; 図版12・13・52) A19KNに位置する。南北6.0m、東西5.9mの方形プランのもので、主軸はN22°Wを指し、壁直下に幅約10~15cm、深さ約5cmの壁溝が巡る。柱穴は4ヶ所あり、いずれも直径20cm程度、深さ20~30cmである。柱穴間の距離は南北2.9m、東西2.7mである。南辺の中央付近には、平面形が長方形に近い不定形をした60×80cm、深さ50cm程度の土坑があり、貯蔵穴と考えられる。さらに東西両壁際に幅0.8~1m、高さ10cmの地山を整形した「ベッド」状の台部がある。炉は住居のほぼ中央に重なって2ヶ所検出した。上部の炉は直径約50cmの円形を呈し、深さは10cm程度である。下部の炉は上部の炉に切られているため規模等不明な点が多いが上部のものと近似していると思われる。いずれの炉も南側の上部に赤く焼けた痕跡がある。また炉を中心として約



第18図 1370-OD 遺物図1

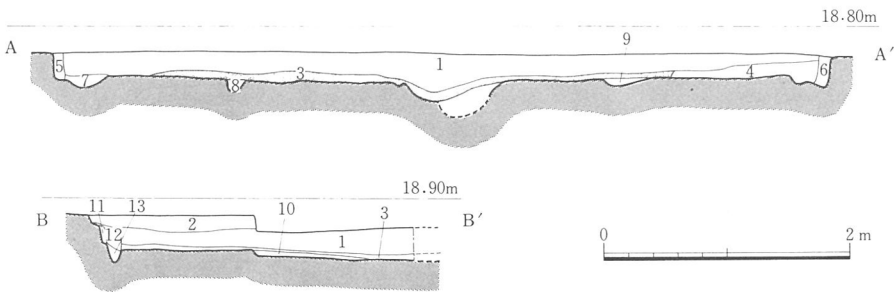
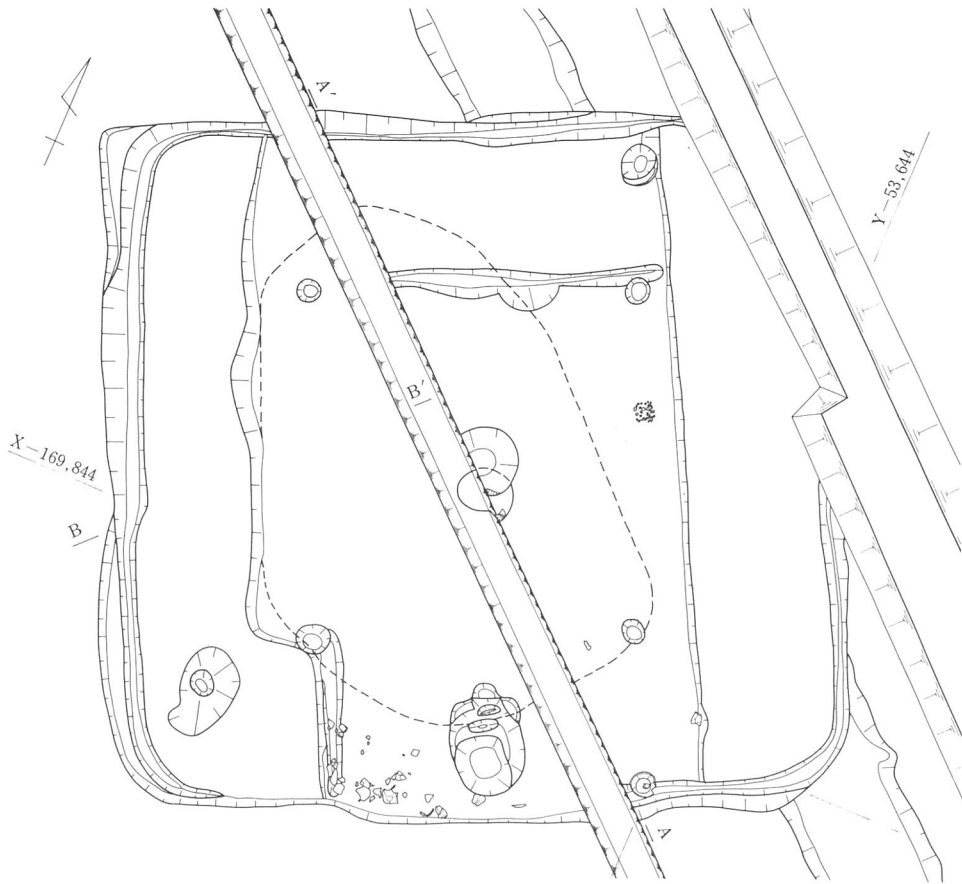


第19図 1370-O D 遺物図 2

4 × 3 mの範囲に厚さ数cmの炭層の広がり認められた。遺物の出土状況は貯蔵穴の付近に比較的集中して認められた。

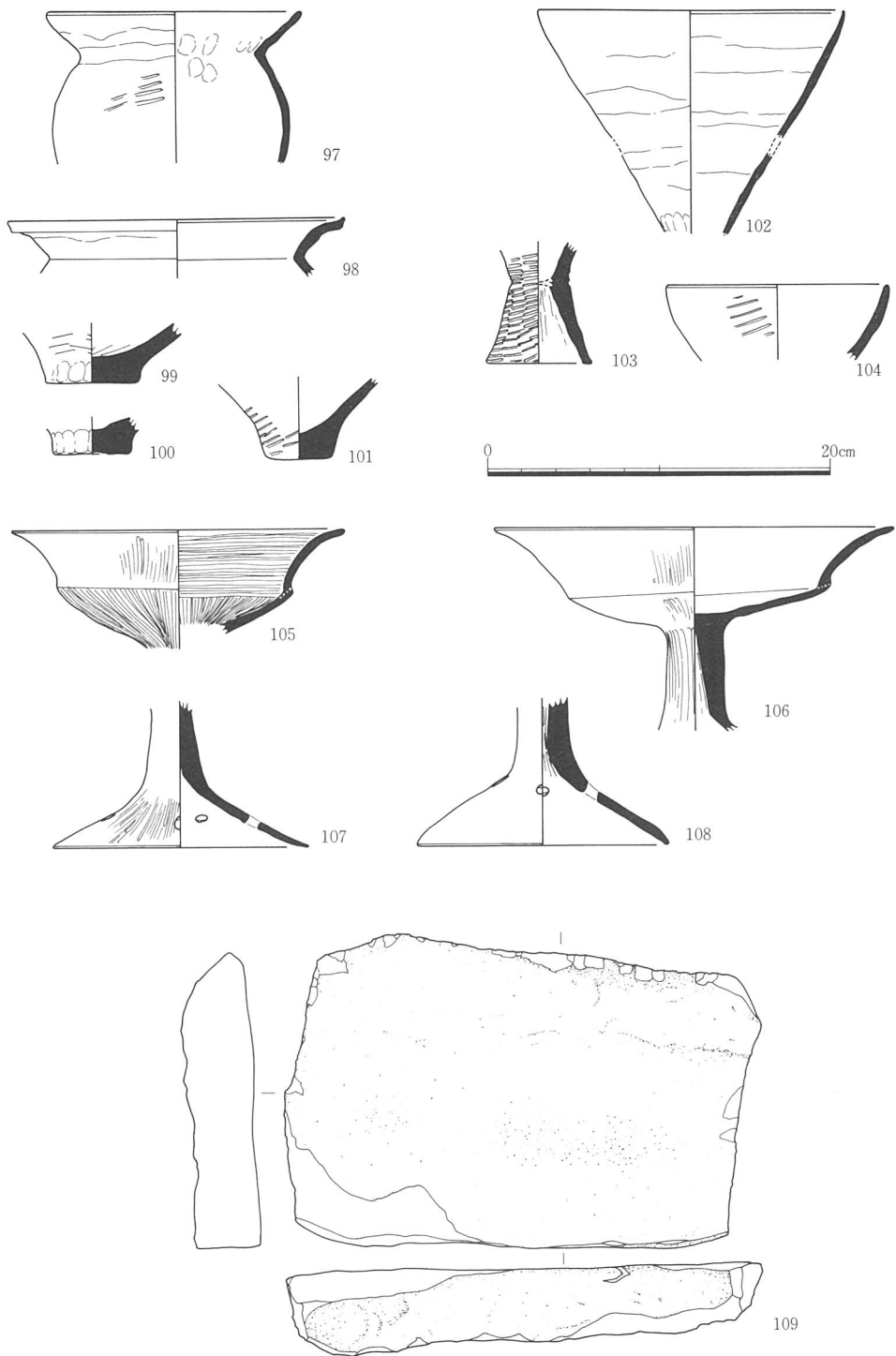
出土遺物は壺 6 点(749・750・753)、甕 8 点(97・98・751・752)、高杯10点(105~108)、鉢 1 点、製塩土器 3 点(102~104)、底部 7 点(99~101・754~757)、砥石 1 点(109)である。甕は外面にタタキ目を残し、内面の調整はナデである。109は貯蔵穴内から出土したものである。

1 3 6 7 (第14・16図; 図版14・53) A 19K J 付近に位置する。東西3.6m、南北3.5m、深さ約15cmの方形プランを呈するものである。主軸はN16°Eを指し、壁直下に幅15cm程度、深さ15cmの壁溝が巡る。柱穴は四ヶ所あり、直径20~40cmの円形で深さ10~50cm、柱穴間の距離は約2mである。住居の中央やや南よりに幅70cm、深さ10cm程度の不定形の浅



- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 10YR 4/2 褐色シルト | 8. 10YR 6/2 灰黄褐色シルト |
| 2. 10YR 6/4 にぶい黄褐色シルト | 9. 10YR 6/4 にぶい黄橙色シルト |
| 3. 10YR 4/2 暗褐色シルト | 10. 10YR 4/2 暗褐色シルト |
| 4. 10YR 4/2 暗褐色シルト | 11. 10YR 6/4 にぶい黄褐色シルト |
| 5. 10YR 6/2 灰黄褐色粘質シルト | 12. 10YR 4/2 褐色シルト |
| 6. 10YR 6/4 にぶい黄橙色シルト | 13. 10YR 4/2 暗褐色シルト |
| 7. 10YR 4/2 褐灰色シルト | |

第20図 1384-OD 平・断面図



第21图 1384-O D 遺物図

い土坑がある。焼けた痕跡は認められないが、炉と思われる。壁溝内には土層断面の観察から、板壁材と裏込め土の痕跡が認められた。埋土は2層に分かれ、下層より灰褐色シルト層、明黄褐色シルト層であるが、灰褐色シルト層は炭層で床面直上に3cm程度の厚さで一様に認められる。第6層黄褐色シルト層は住居のベース直上に見られ張床土と考えられる。

出土遺物は、壺1点、甕の口縁部3点(54)がある。54は、口縁端部を肥厚させるもので、口縁部から胴部上半部が完存する。またこの甕は口縁部を下にして南東端の柱穴の上に覆いかぶせる状態で出土した。炭層はその上に堆積しており、柱、垂木等の「上屋」材を取り除いた後、火を受けたものと思われる。

2. 土坑(OO)

923(第12図;図版15) A19GI・HIに位置する。検出面は付近のものより20cm程下層である。平面形は南側を攪乱土坑に切られているため不明であるが、正方形に近い不定形を呈すると思われる。一辺1.4m、深さ40cmである。埋土は2層で、下層より褐灰色粘土層、にぶい黄橙色粘土層である。

出土遺物は壺2点、甕4点、高杯1点等があるが、いずれも小片である。

507(第12・24図;図版15・55) A19GIに位置する。平面形は南北両端を攪乱土坑に切られているために不明であるが、長方形ないし楕円形を呈するものと思われる。短径約70cm、深さ約30cmである。埋土は黒褐色粘質土層である。

出土遺物は壺8点(129~131)、甕6点、高杯6点(127・128)である。130は外面にタタキ目が見られないこと、やや開き気味に立ち上がることから壺の底部とした。甕は外面にタタキ目を残す。

509(第12図;図版15) A19HHに位置する。平面形は西端を攪乱土坑に切られているが、楕円形を呈するものと思われる。短径約1m、深さ34cmである。埋土は大きく3層に分かれ、いずれも明褐色系のシルト層である。

出土遺物はきわめて少なく、外面にタタキ目を残す甕体部片1点のみである。

511(第12図) A19FIに位置する。平面形は付近の遺構との重複関係が著しく不明である。埋土は褐色粘質土層である。

出土遺物は少なく壺体部片1点、外面にタタキ目を残す甕体部片1点のみである。

512(第12図;図版15) A19GHに位置する。511-OOと同様、遺構の平面形は不明である。埋土は褐色粘質土層である。

出土遺物は認められないが、埋土が付近の遺構と近似していることから同時期のものと

考えられる。

5 1 3 (第12図; 図版15) A19FHに位置する。511-OOと同様、遺構の平面形は不明である。深さは約25cmである。埋土はにぶい黄褐色粘土層である。

出土遺物は少なく壺体部片1点のみである。

5 1 5 (第12図; 図版15) A19GHに位置する。平面形は大半を攪乱土坑に切られており不明である。埋土は褐色系の粘土層である。

出土遺物は認められないが、付近の遺構と同時期と思われる。

5 2 1 (第22~24図; 図版15・53・54) A19BEに位置する。平面形は正方形に近い不定形である。一辺約1m、深さ50cmである。埋土は3層からなり、最下層の黒褐色粘質シルト層には遺物、炭が多量に含まれていた。

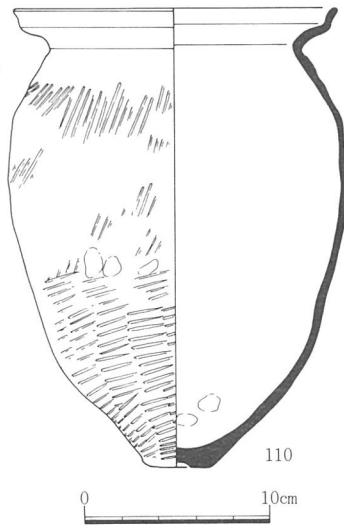
出土遺物は壺19点(112・113)、甕88点(110・111・114~122)、高杯15点(123~126)等がある。甕の外表面はすべてタタキ目が認められ、110は口縁部を上方に屈曲させている。

1 3 6 4 (第25・26図; 図版17・55・56) A19KLに位置する。平面形は細長い不定形であるが、北東部分は不明である。幅約1.8m、深さ22cmである。埋土は黄褐色シルト層である。出土遺物は比較的多く、壺10点(136・137)、甕27点(132~135・138~140)、高杯11点(141~145・150・153・154・156・159・160)、製塩土器26点(146~149・151・152・155・157・158・161)である。

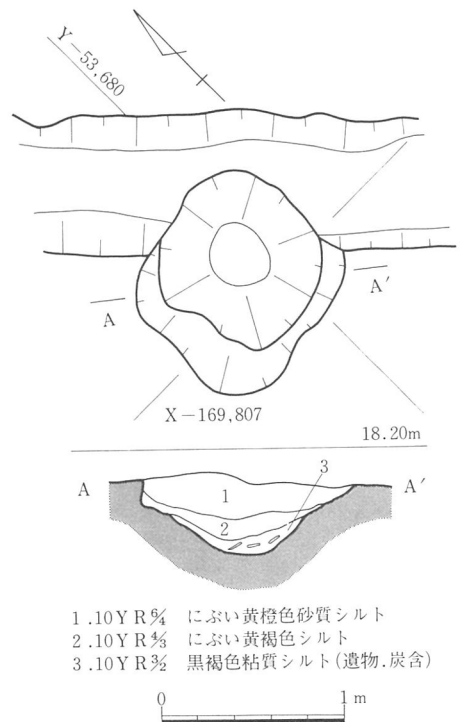
製塩土器脚部が集中して出土しているが、風化が著しく高杯脚部との区別が困難である。外面にタタキ目を残すもの、脚端部が短く開くものを製塩土器とした。

1 3 6 5 (第26図)

A19KLに位置する。平面形は方形に近い不定形で、一辺

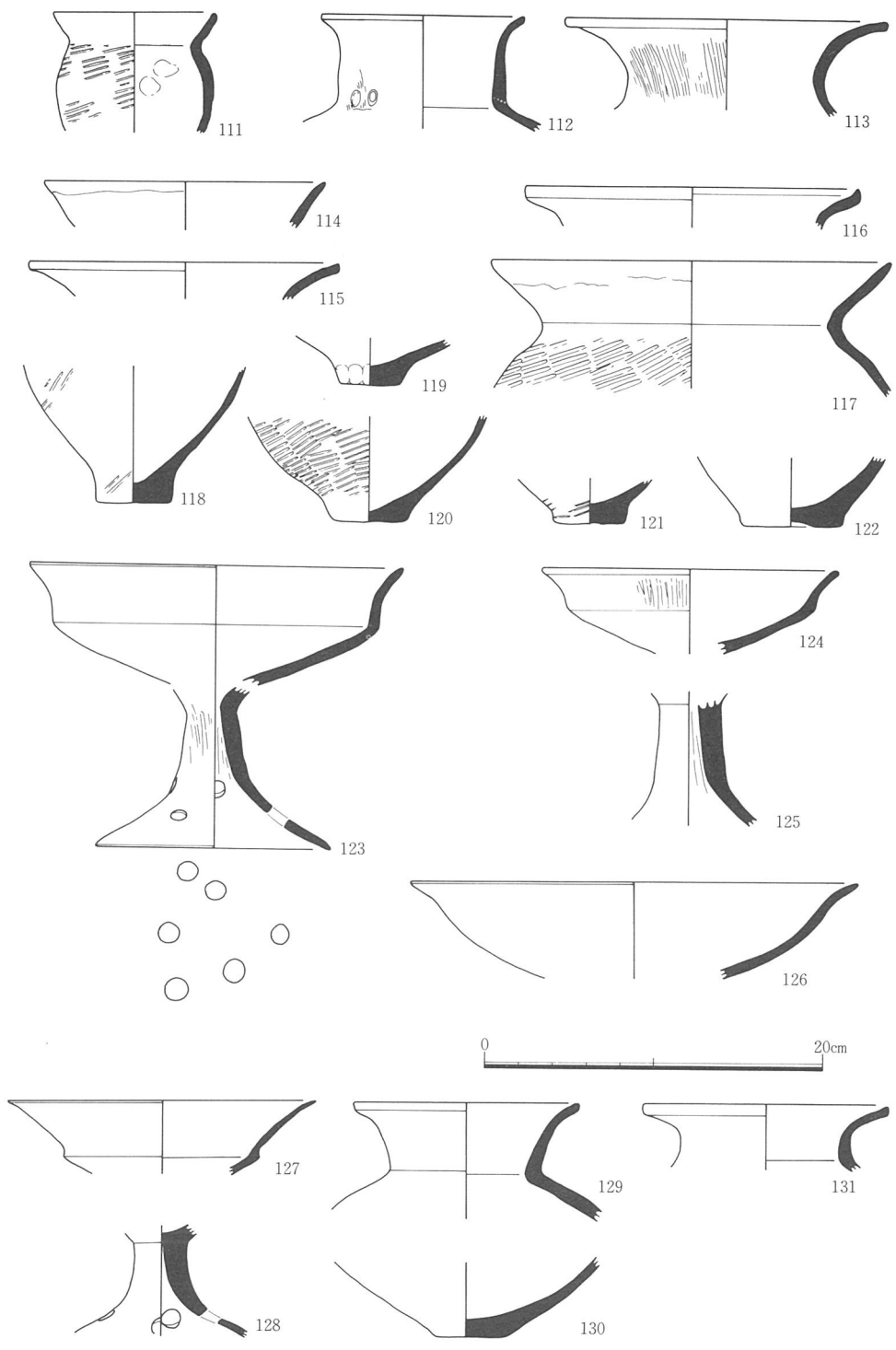


第22図 521-OO 遺物図



第23図 521-OO 平・断面図

1. 10YR 5/6 にぶい黄橙色砂質シルト
2. 10YR 5/6 にぶい黄褐色シルト
3. 10YR 2/3 黒褐色粘質シルト(遺物、炭含)

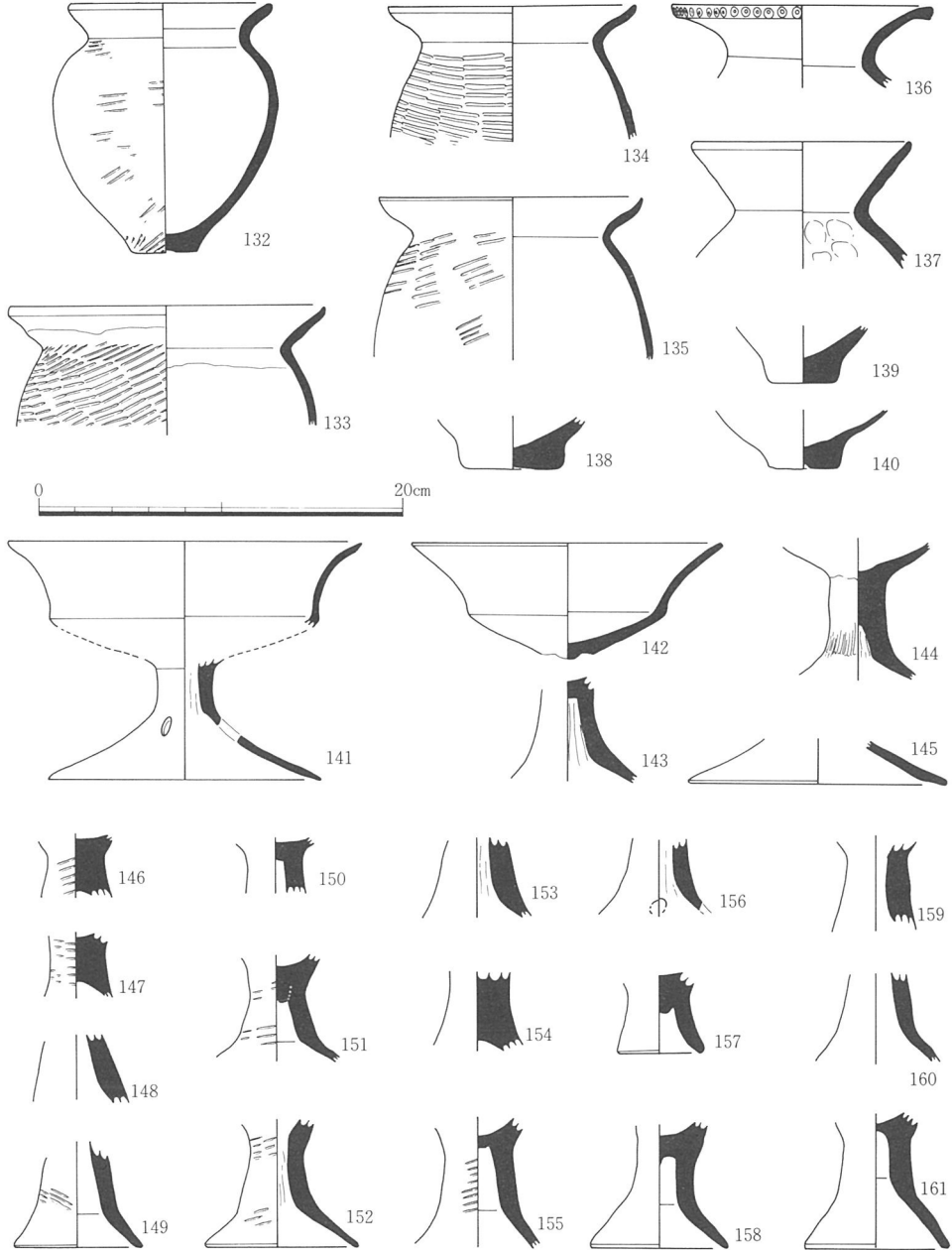


第24图 521·507-00 遺物图

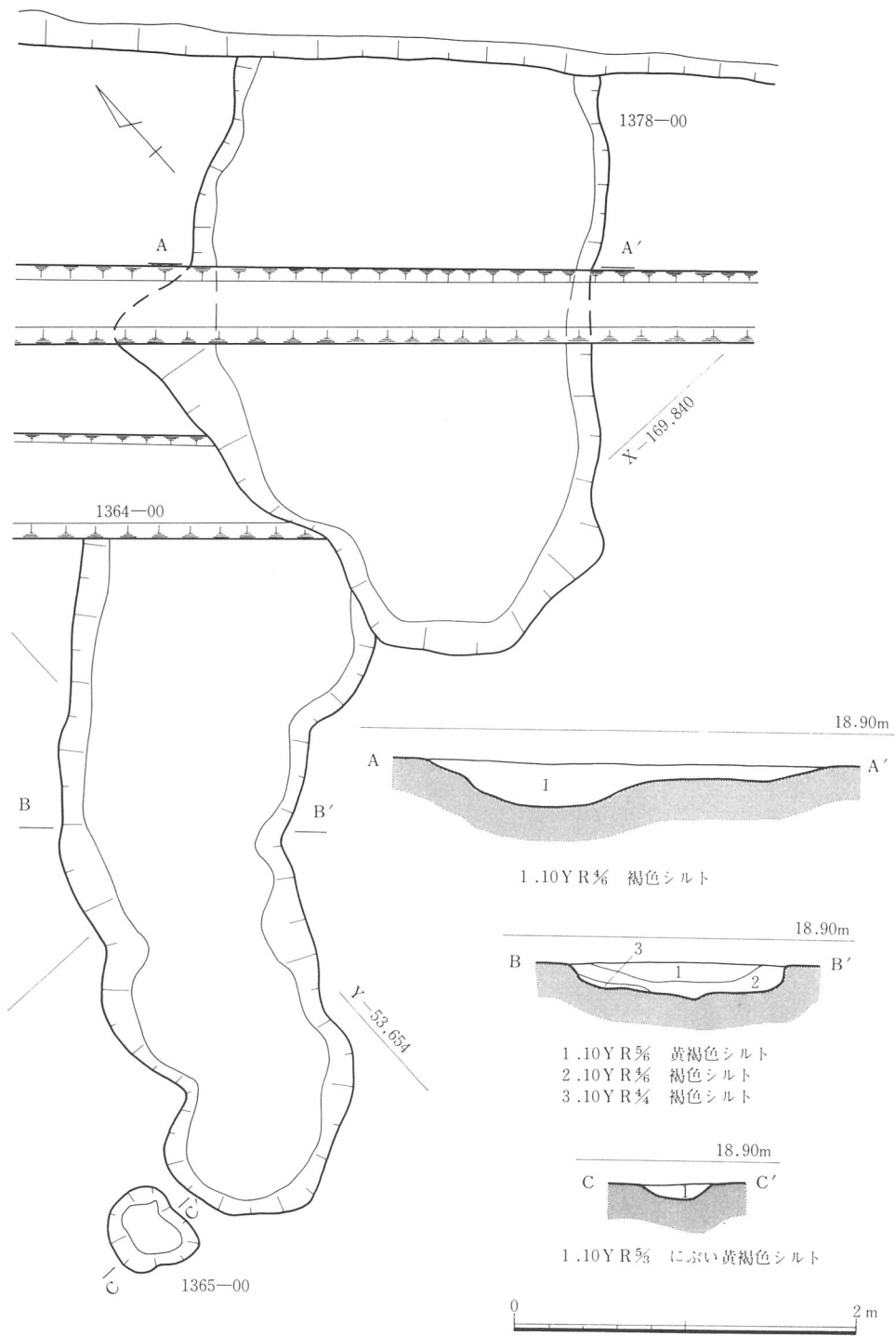
約50cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト層である。出土遺物は器形不明品が1点ある。

1366 (第14・28図；図版17・58) A19KLに位置する。平面形は長方形に近い不定形を呈する。長辺2.0m、短辺0.9m、深さ8cmである。埋土は褐色シルト層である。

出土遺物は壺1点、甕6点(163)、鉢1点等がある。



第25図 1364-O O 遺物図



第26図 1364・1365・1378-00 平・断面図

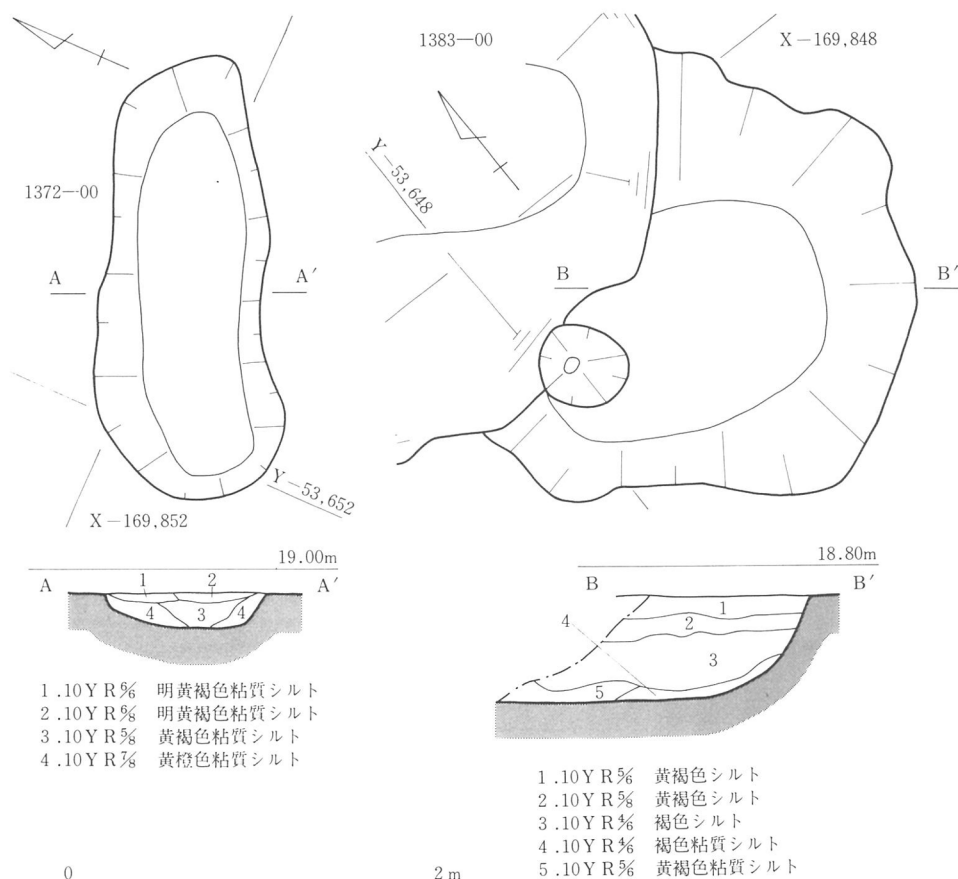
1371 (第14図; 図版16) A19KKに位置する。平面形はほぼ円形を呈する。直径0.7m、深さ6cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質シルト層である。

出土遺物は炭化物の小片があるが、土器は認められない。

1372 (第27・28図; 図版16・58) A19NM付近に位置する。平面形は楕円形を呈する。長径2.4m、短径0.9m、深さ20cmである。埋土は大きく2層に分かれ、いずれも黄褐色系の粘質シルト層である。

出土遺物は甕3点(162)、高杯2点(164)等がある。甕162は完形品に近いもので、体部上半部は平行タタキ目、下半部には右上がりのタタキ目が認められる。高杯164は浅い半球状の杯部をもつものである。

1377 (第14図; 図版16) A19KI・LIに位置する。平面形は西側が調査区外にのび、東側一部は1367-ODに切られているため不明である。深さは14cmである。埋土は黄褐

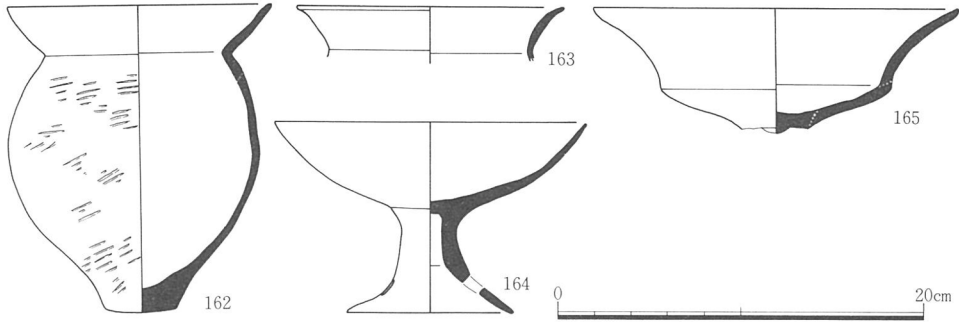


第27図 1372・1383-00 平・断面図

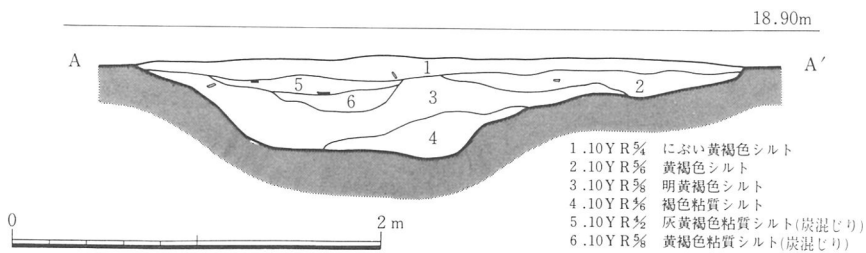
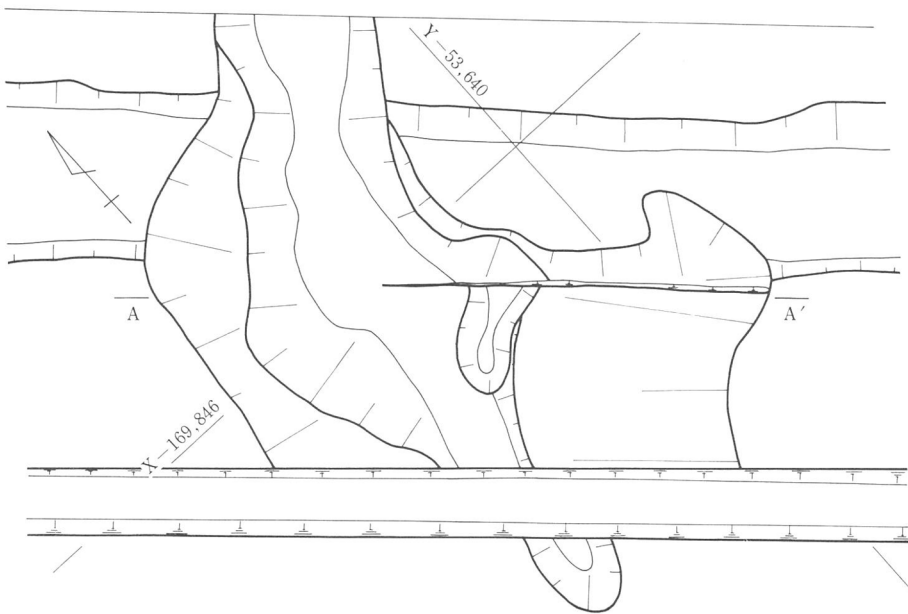
色系の粘質シルト層である。

出土遺物は壺7点、甕10点等があるが、いずれも小片である。

1378 (第26・28図；図版17・58) A19JM付近に位置する。平面形は北東側は505-



第28図 1366・1372・1378-O O 遺物図



第29図 1379-O O 平・断面図

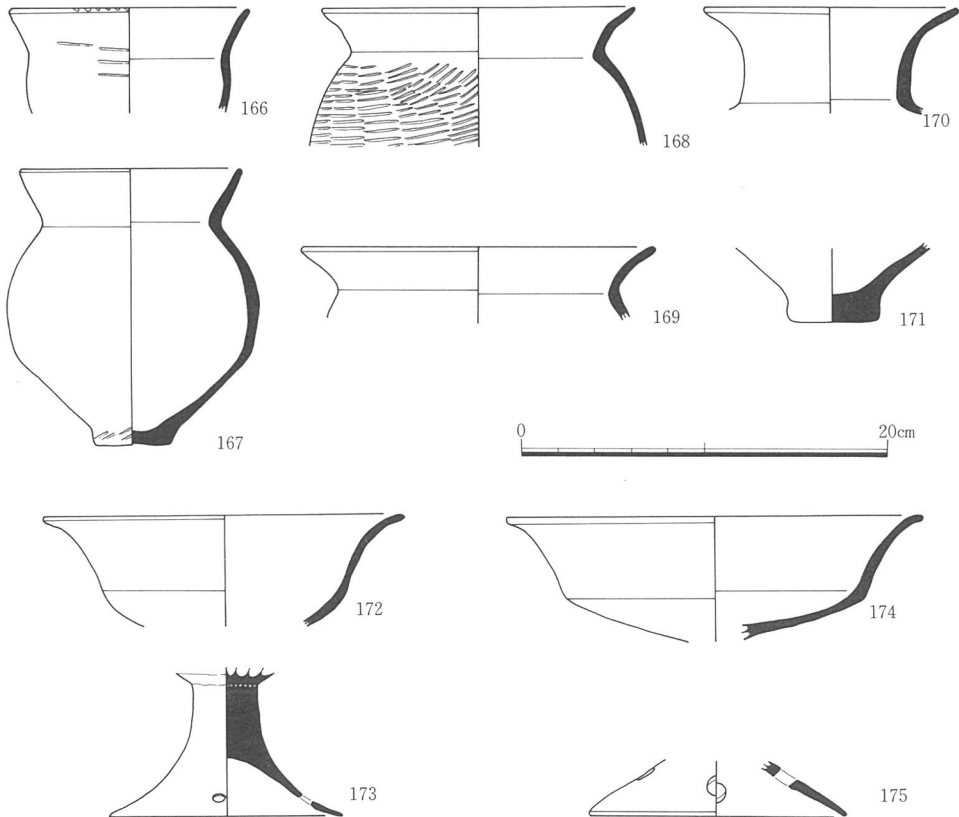
OSに切られているが、楕円形に近い不定形を呈すると思われる、短径2.7m、深さ25cmである。埋土は褐色シルト層である。

出土遺物は壺の体部片2点、甕の体部片2点、高杯の杯部片1点（165）がある。

1379（第29・30図；図版16・57） A19LO付近に位置する。平面形は不定形を呈する。幅約3m、深さ50cmである。埋土は大きく4層に分けられ、下層より褐色粘質シルト層、明黄褐色シルト層、黄褐色シルト層、にぶい黄褐色シルト層で、黄褐色シルト層は炭化物および土器を多く包含する。

出土遺物は壺6点（170・171）、甕17点（166～169）、高杯16点（172～175）等がある。甕は口縁部を「く」の字に屈曲外反するものと、ゆるやかに外反するものがある。高杯は杯部中央で屈曲して外反する。

1383（第27図） A19MN付近に位置する。平面形は北西側を攪乱土坑に切られているが、楕円形に近い不定形を呈するものと思われる。幅約2.2m、深さ60cmである。埋土は



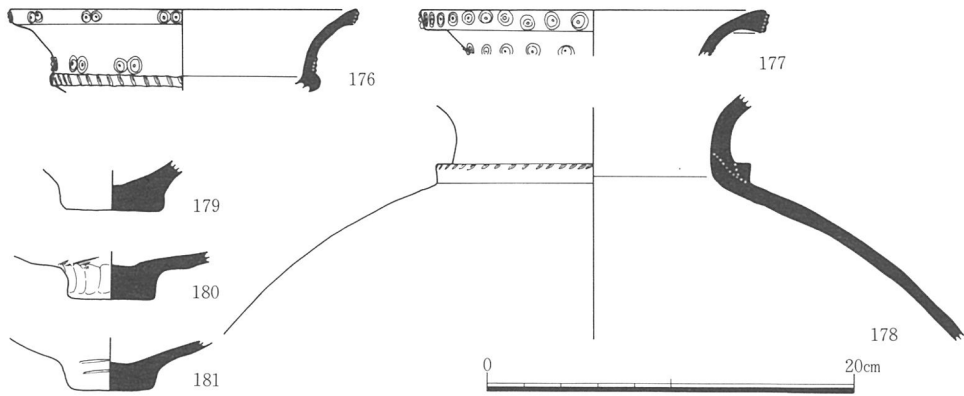
第30図 1379-O O 遺物図

は大きく3層に分かれるが、いずれも褐色系の粘質シルト層あるいはシルト層である。

出土遺物は壺の口縁部片2点、高杯の脚部片2点がある。

1385 (第15・31図; 図版18・58) A19NPに位置する。平面形は1370-O Dに切られているため明確ではないが、長径2m以上、短径約1.8mの楕円形を呈するものと思われる。深さは約20cmであるが、底部の南東部分がさらに長さ約1.1m、幅約50cmにわたって深くなっており、深さは約45cmである。埋土はにぶい黄橙色シルト層である。

出土遺物は、壺15点(176~181)、甕4点、高杯5点の他、土器細片を多数認める。



第31図 1385-O O 遺物図

3. 溝 (OS)

1373・1374 (第32・33図; 図版19) A19MK・NK付近に位置する。南西側は調査区外にのびるため全体を検出しえなかったが、1376-O Sと同様に「コ」の字状、あるいは全周するものと思われる。一辺7.2m、深さ約15cmである。埋土は黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は小型丸底埴1点(182)、甕7点(183)、高杯2点等がある。

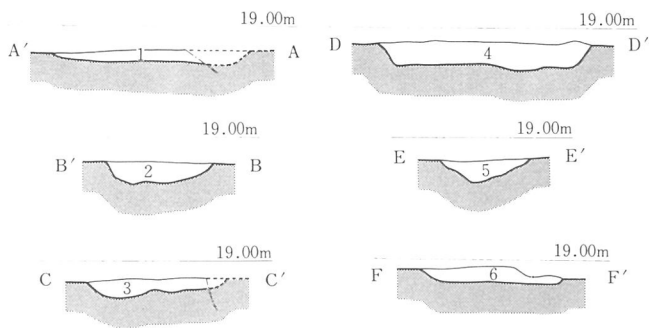
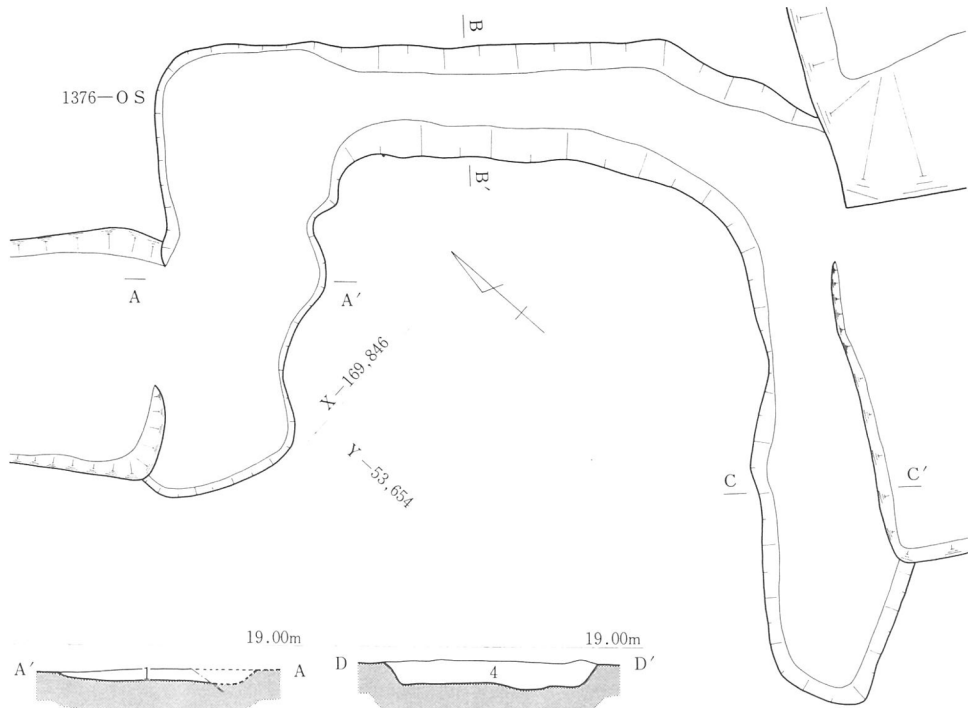
1376 (第32・33図; 図版19) A19LM付近に位置する、「コ」の字状に巡る溝である。一辺約6m、深さ約20cmである。埋土は黄褐色シルト層である。

出土遺物は壺1点(184)、甕1点、高杯1点等がある。

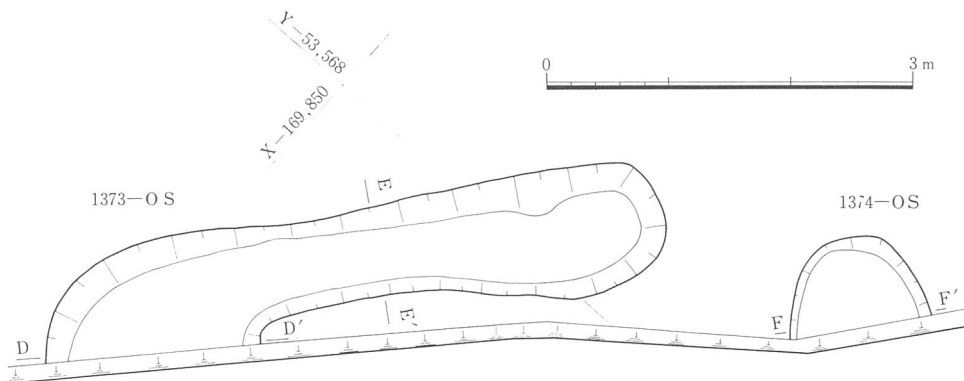
503 (第33・34図; 図版20・58) II区南東部からIII区北東部にかけて位置し、1360-ORから派生する。断面形はU字状を呈し、幅50~70cm、深さ50~60cmである。埋土は大きく2層に分かれ、下層より黄褐色系の粗砂層、褐色系の粘土層である。

出土遺物はきわめて少なく甕の底部片1点(185)、体部片6点がある。

504 (第120図) II区を横断するもので、A19HO~KPにかけて位置する。幅30~40cm、深さ10~15cmである。埋土は上層が黄褐色シルト層、下層は灰色砂層である。



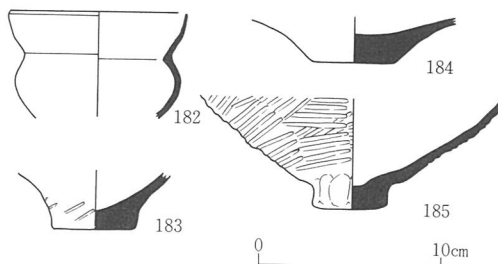
- 1. 10Y R% 黄褐色粘質シルト
- 2. 10Y R% 黄褐色シルト
- 3. 10Y R% 黄褐色シルト
- 4. 10Y R% 黄褐色粘質シルト
- 5. 10Y R% 黄褐色粘質シルト
- 6. 10Y R% 黄褐色粘質シルト



第32図 1373・1374・1376-O S 平・断面図

出土遺物は少なく外面にタタキ目を残す甕の体部片等が数点ある。

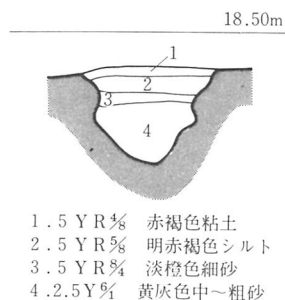
911 (第122図) A20U I~WJ に位置する。幅約80cm、深さ約35cmである。埋土は大きく4層に分かれ、上部3層は黄褐色系のシルト層、最下層は3cm程度で暗灰黄色粘質シルト層である。



第33図 503・1373・1376-O S 遺物図

出土遺物は外面にタタキ目を残す甕体部片がある。

1363 (第122図) III区A25AG 付近に位置する。断面形はU字状を呈し、幅60cm、深さ12~34cmで、北西に向かって深くなる。埋土は大きく2層に分かれ下層より褐灰色系の粘質シルト層、灰黄褐色系のシルト層である。



- 1. 5 Y R 8/10 赤褐色粘土
- 2. 5 Y R 8/10 明赤褐色シルト
- 3. 5 Y R 8/10 淡橙色細砂
- 4. 2.5 Y 8/10 黄灰色中~粗砂

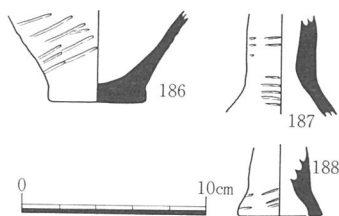


第34図 503-O S 断面図

出土遺物は甕2点、高杯1点等がある。

4. 自然河川 (OR)・水利施設 (OI)

508・522 (第35・119図；図版21) I区南西部に位置する。508は522の上部に認められる遺構で、522の埋没後できた窪地と考えられ、ここでは同一遺構として報告する。検出全長約21m、幅3~4m、深さ1.5~2mである。埋土は508がにぶい黄褐色シルト層、522が暗灰黄色砂層である。北西側は501-ORに切られている。

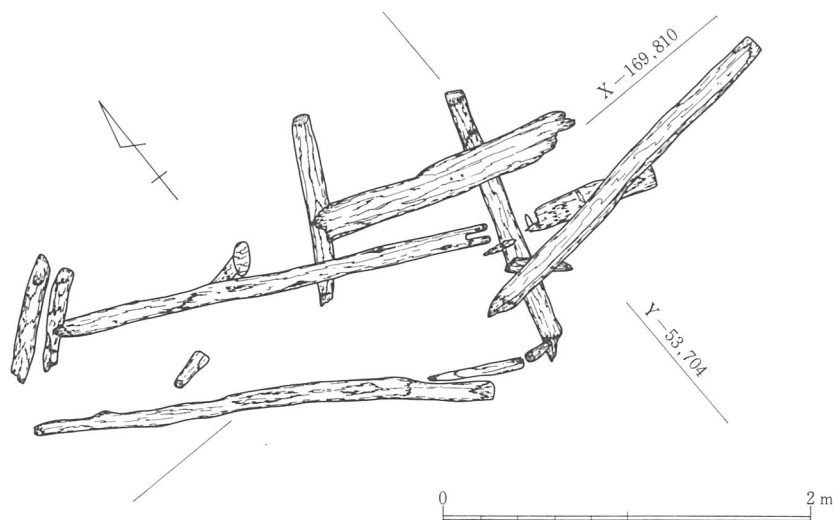


第35図 508・522-OR 遺物図

出土遺物は壺2点、甕3点(186)、高杯8点、製塩土器2点(187・188)、鉢1点等がある。

501・924 (第37~45図；図版21・22・59~64) I区のほぼ西側2/3をしめる自然河川で、川幅は30mを超え、東肩からほぼ中央付近まで確認したに過ぎない。深さは3.5m以上あると考えられる。方向としては調査区内においてはA19IFからA14YDにかけてはほぼ南から北に向かって流れていたものと思われる。しかし、出土した土器は弥生時代後期前半から古墳時代前期のものまで含まれていること、最も新しい時期の土器(布留式の甕約90点)の分布状況を見ると平面的な広がりには西半分集中しているものの、河川の東半分においても量的には少ないが、上層から下層に至るまで認められること、さらに埋土の

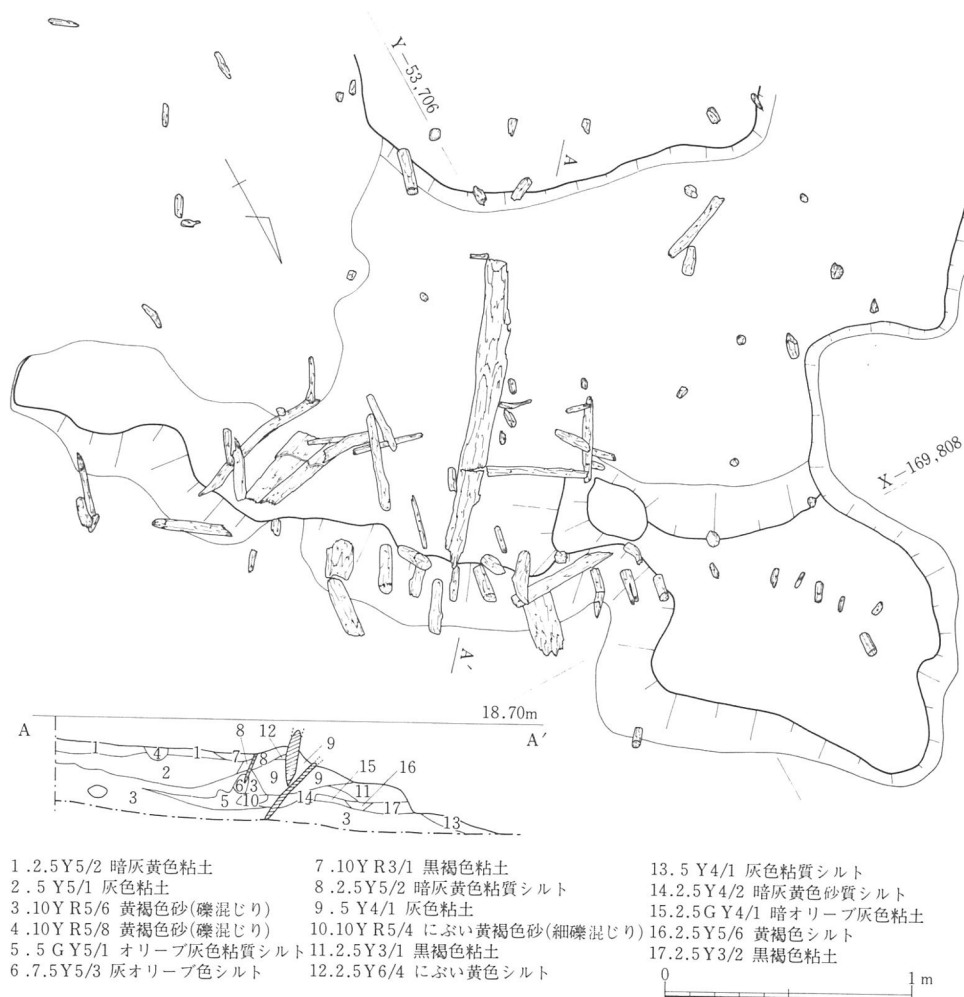
堆積状況からも時期を異にした複数の河川が重複している可能性が高いと思われる。しかし、検出した河川の肩は付近の土層の堆積状況から、シルト層の斜面堆積が認められ徐々に岸近くから埋没した状況を示す。さらに、これらの堆積層の上面に533-O Xが位置することも考慮に加えると最終的に検出した河川の肩は弥生時代後期後半以前の可能性が高いと言える。I 区の西端付近A18B X・C Xの501-O R内に、長さ約4 mの杭列が認められる。杭列に使用された丸杭は現存長約45～55 cm、直径4～6 cmのもので青灰色粘質シルト層をベースにして打ち込んでいる。打設の方向は垂直のものやや北側から斜め方向のものがある。現存する杭の高さはベース面から10ないし20 cm程度で詳細な構造は不明である。河川内から検出された点を重視して水利施設としたが、河川から水を取る施設としては接取した水を導入する施設（溝）も確認されておらず、単なる杭列として報告したほうが妥当かもしれない。時期についても定められない。出土遺物は総数2117点と極めて大量にあるが、先に述べたような状況下で検出したものであるからかなりの時期幅を持っていることは否めない。土器は壺230点（189～204）、甕356点（205～231）、高杯115点（232～240）、鉢10点、製塩土器12点（242～248）、手焙形土器（258）、タコ壺、器台（241）、ミニチュア土器各1点等がある。木製品は高床建築の部材4点（259～262）、杭約30点（263～268）がある。259、260は柱材と考えられる。両方を組み合わせると1本の柱として復元することができ、長さ2.8 mで、ちょうど中間付近から上部は半裁されている。259の上端を見れば「コ」の字状に「ほぞ」が切られており「梁」をのせた部分と



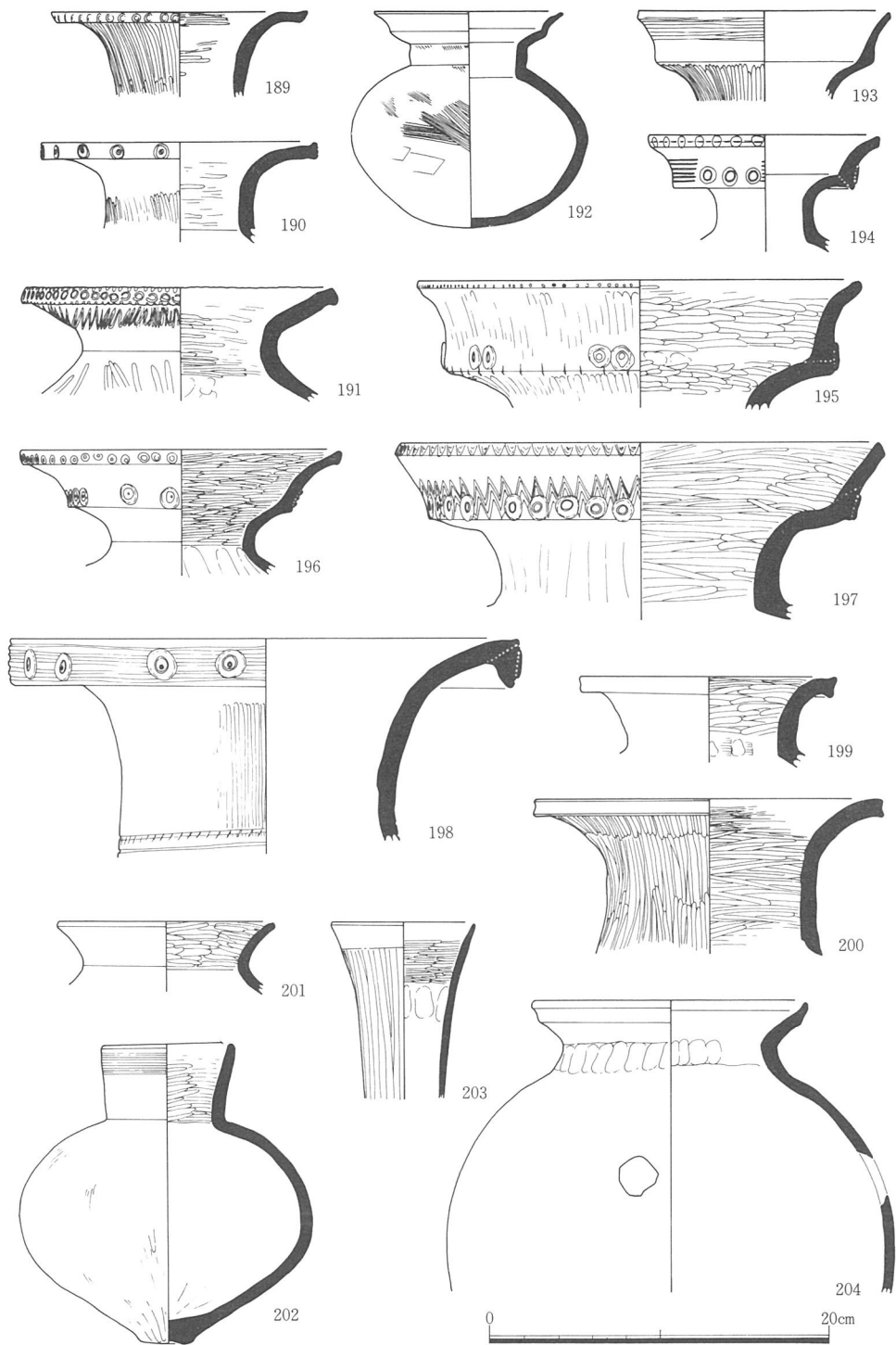
第36図 501-O R 建築部材出土状況図

考えられる。下端は片面のみカットされている。260の下端から約30cmは黒く変色しており地中に埋まっていた部分に当たると思われる。261は直径14.4cm、長さ205cmの丸太材に縦方向に幅3.4cm、深さ2.8cmの「ほぞ」が切られている。両端にも「コ」の字状の「ほぞ」が切られている。棟木の類であろう。262は板状のものである。ほぼ中央に2ヶ所の穴が認めれる。穴は斜め方向に穿たれている。図の上から1/3程下がった部分に長さ30cm、幅4cm程度のえぐれたところが見られるが、焼け焦げた痕跡もあり意識的に加工したものか二次的な火を受けたものかは不明である。杭は924-O Iを構成するものである。

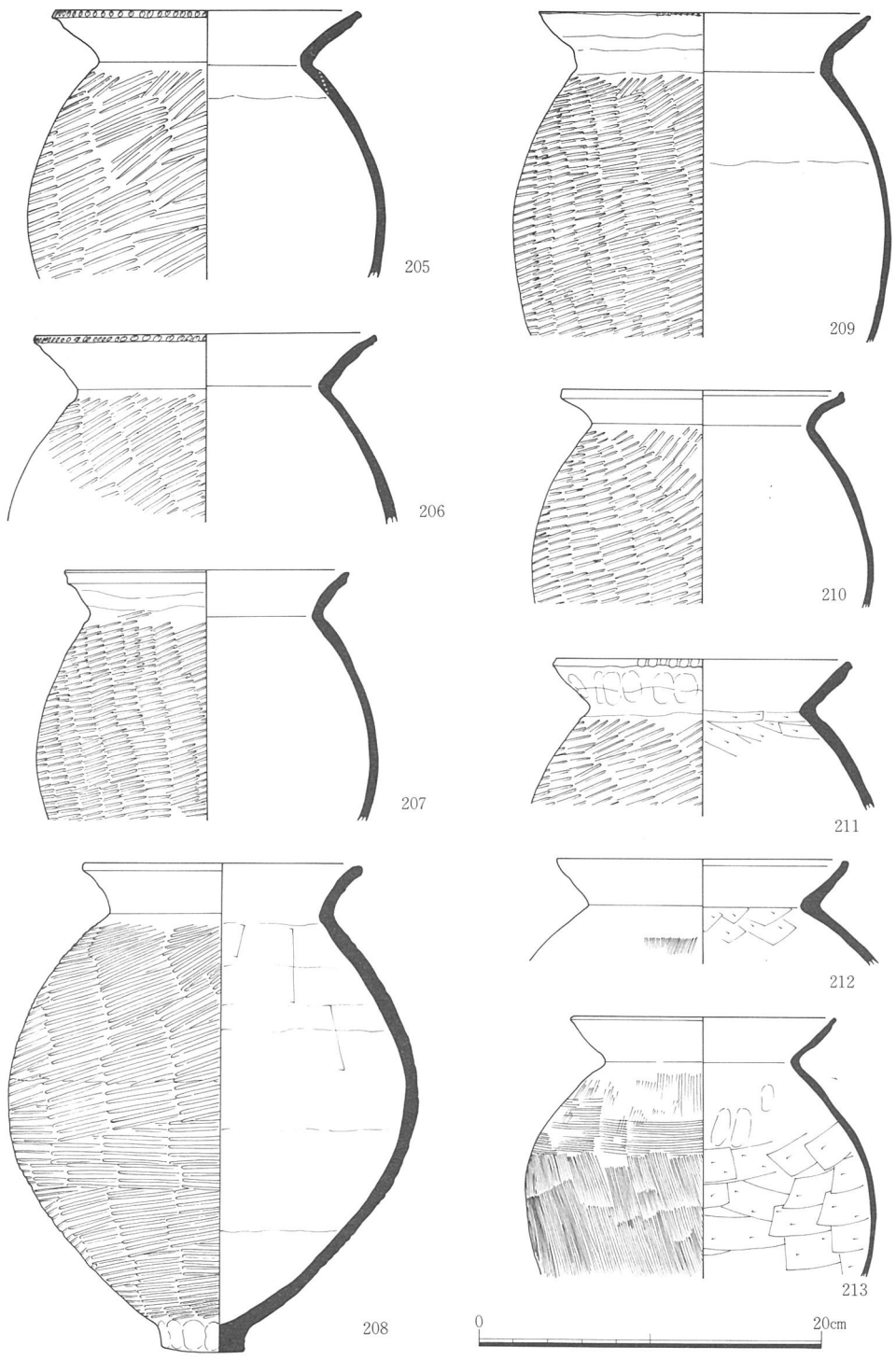
1360・925 (第48・46・47図; 図版20・24・65・25・64) III区南東端からIV区南西端にかけて、部分的に検出した小河川である。A25S W付近で北西方向に、A25R R付



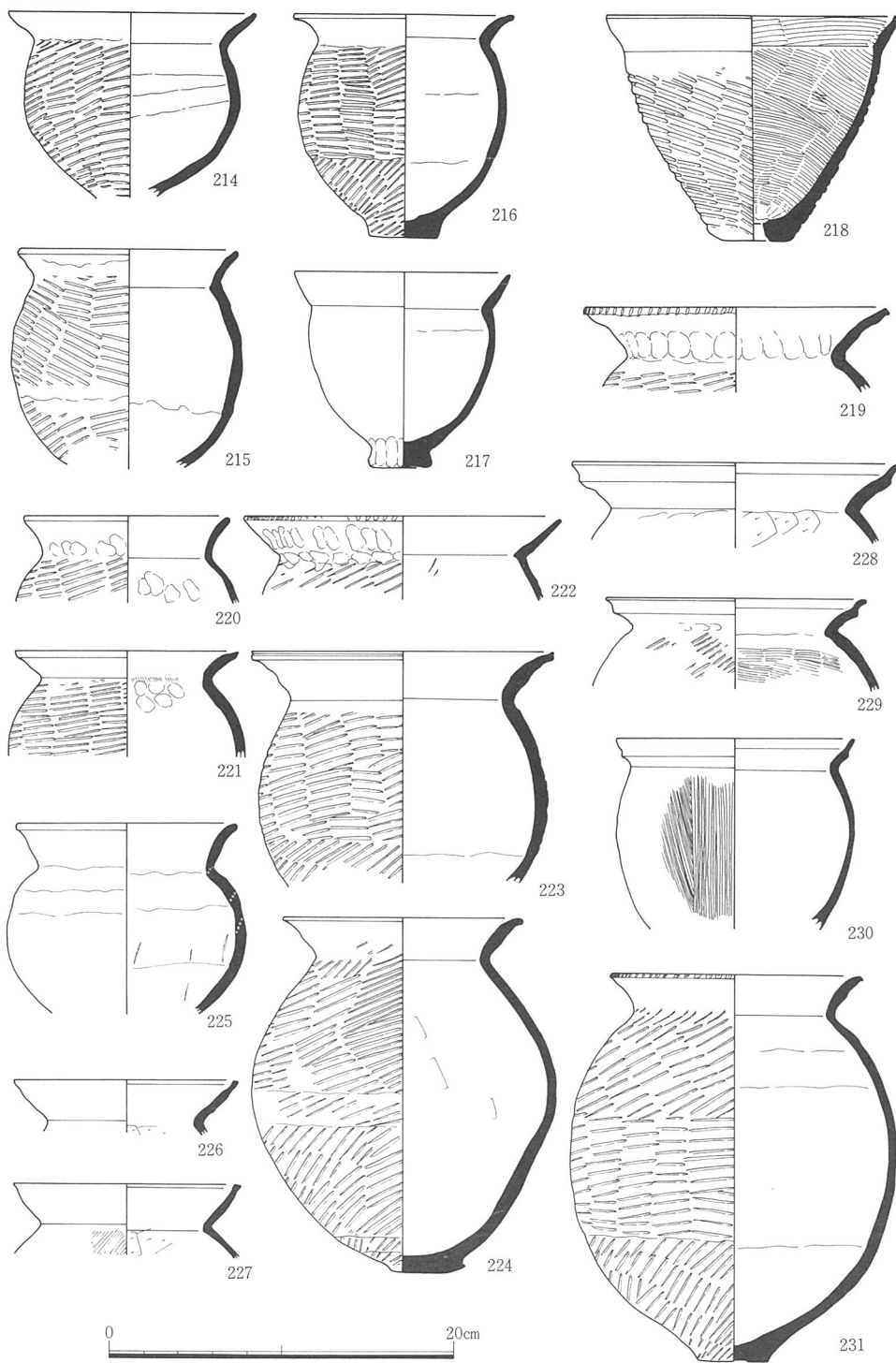
第37図 924-O I 平・断面図



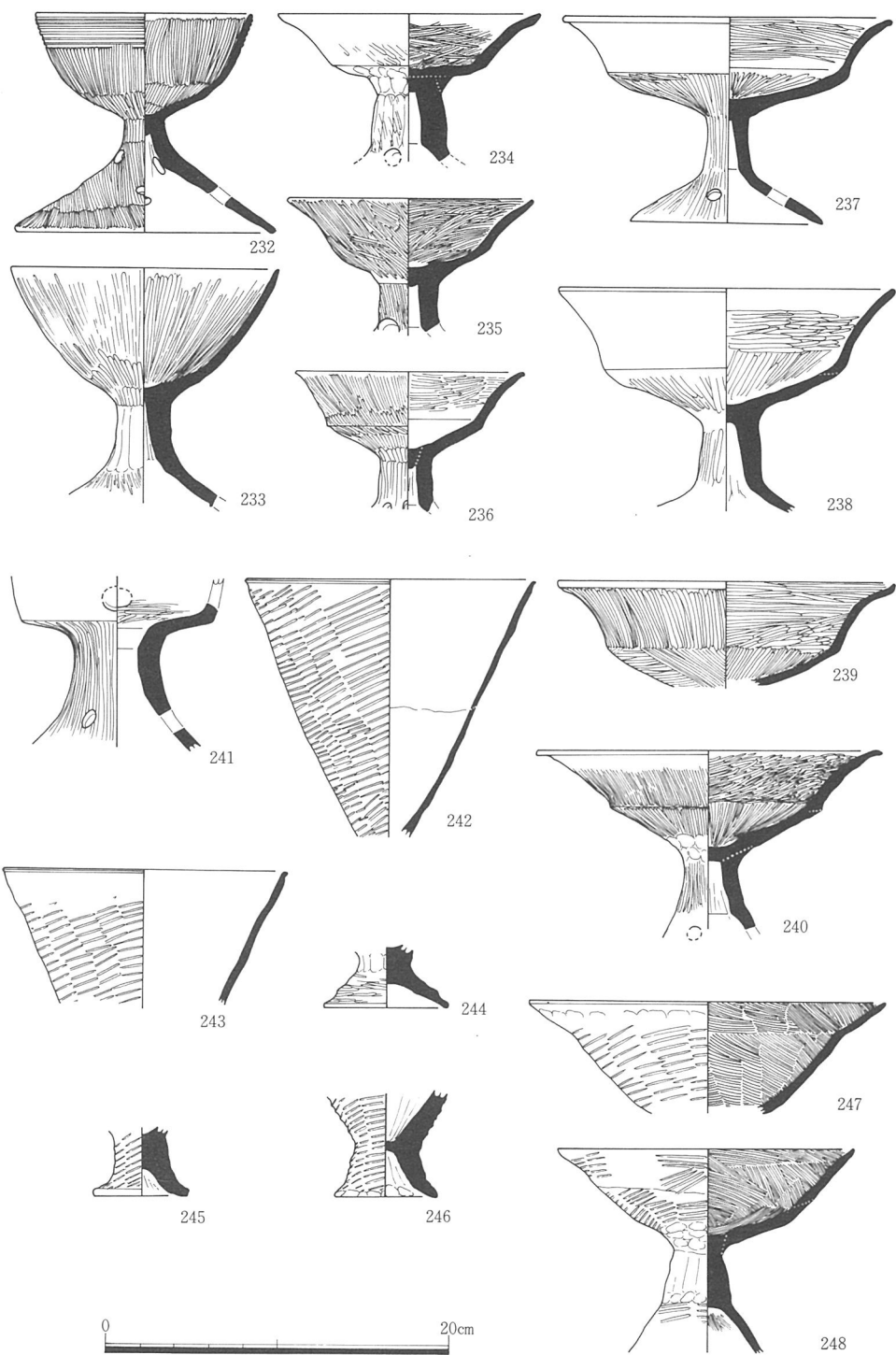
第38图 501-O R 遺物図1



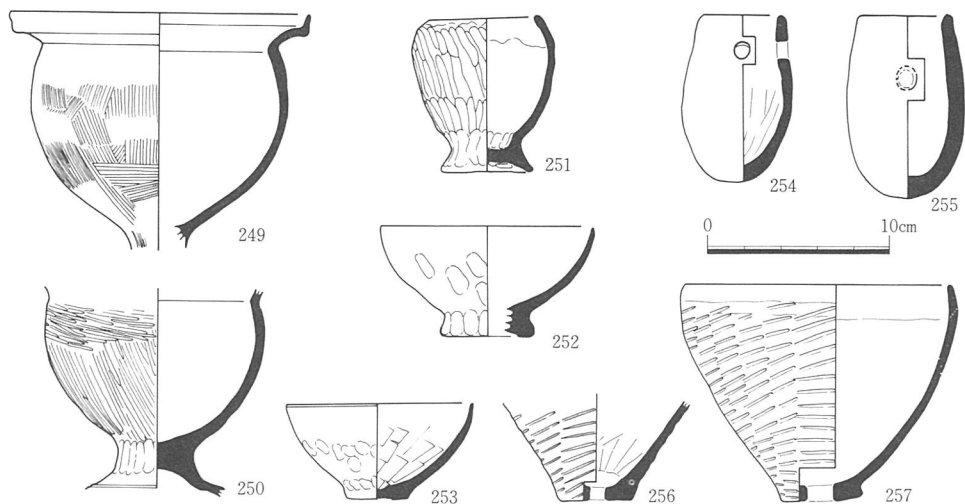
第39図 501-O R 遺物図 2



第40図 501-O R 遺物図3

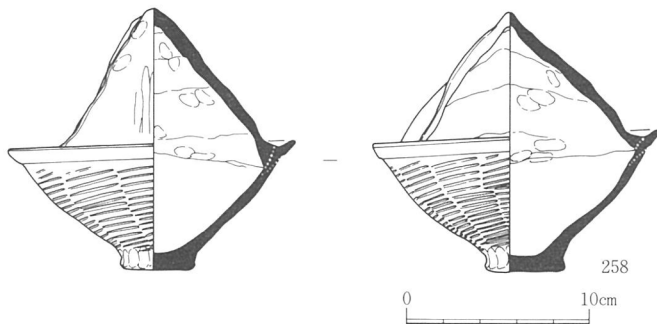


第41图 501-O R 遺物图 4



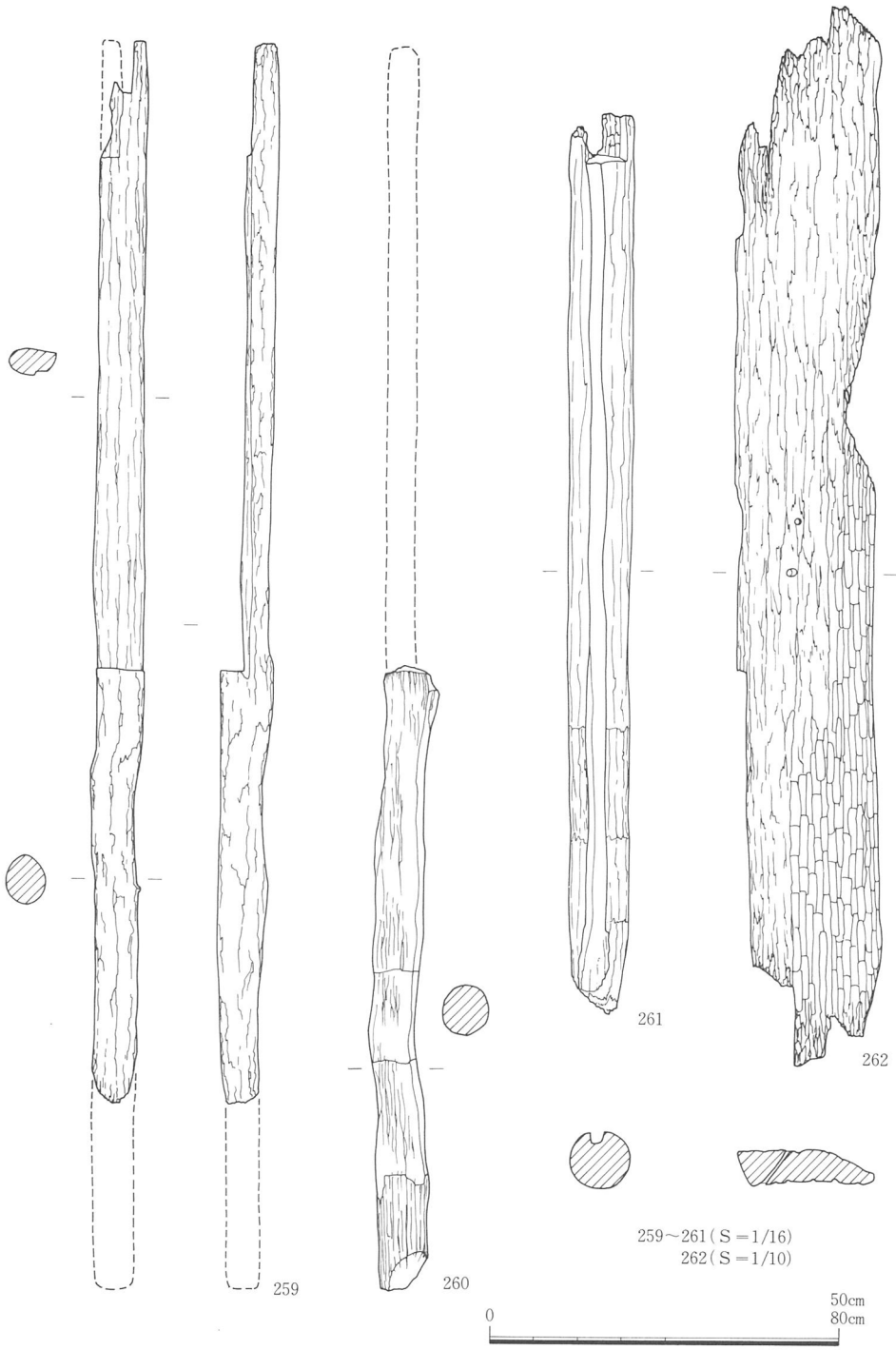
第42図 501-O R 遺物図 5

近で南西方向に蛇行する。
 検出全長約29m、幅2～3
 m、深さ0.4～1.2mであり、
 南西方向に徐々に深くなる。
 埋土は、下層より灰黄褐色
 砂層、褐灰色粘土層、にぶ
 い黄色粗砂層、褐灰色粘質
 粗砂～小礫層であるが、最

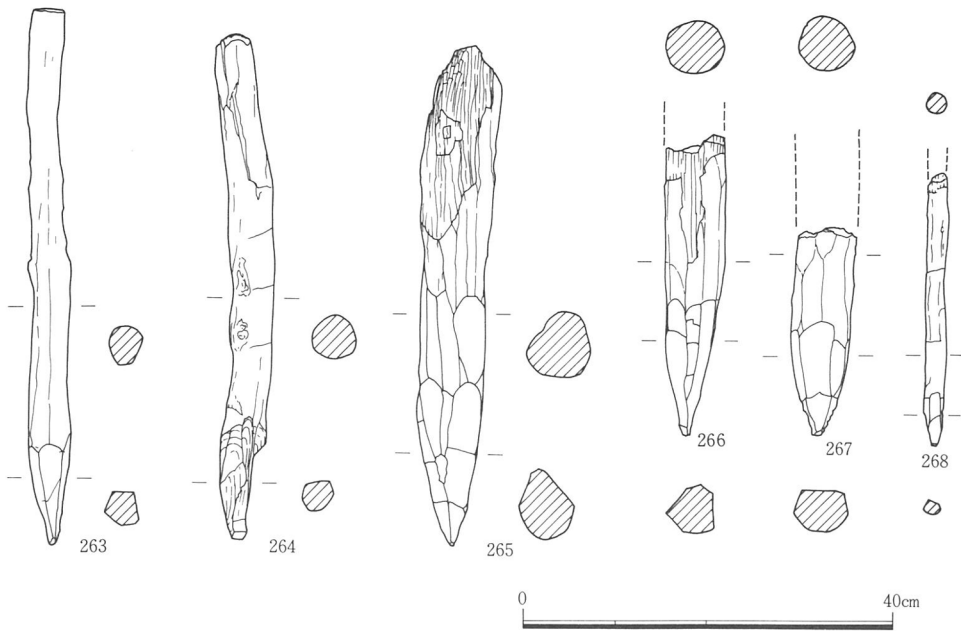


第43図 501-O R 遺物図 6

上層の褐灰色粘質シルト層は、A25 P PからA25 V X付近までの、広い範囲で認められた。
 この河川には水利施設が確認されている。A25 R S・R R付近に、河川に直交するかたち
 で堰(925-O I)を構築し、さらにこの河川から派生するほぼ南北に走る溝(503-O S)
 が掘削されている。溝の取り付け口は「ラッパ」状に大きく開き、底面は川底より50cm程
 上部である。堰の構造はまず縦杭を二列に打ち込んで基礎とし、これを覆うように土手状
 に土盛りを行なうものである。二列の縦杭間の幅は約1mである。縦杭は左岸から中央底
 部にかけては厚さ6～12cm、長さ0.6～1.3m程度の粗い加工を施した比較的大型な角材お
 よび丸杭(270・272～274)を、中央底部から右岸にかけては直径5cm、長さ60cm程度の丸
 杭(296・271)を用い、約20cmの間隔で打ち込んでいる。西側の杭列の中央底部から右岸肩
 部にかけては直径約3cm、長さ30cm程度の雑木を杭に横方向にからませたり、立てかけた



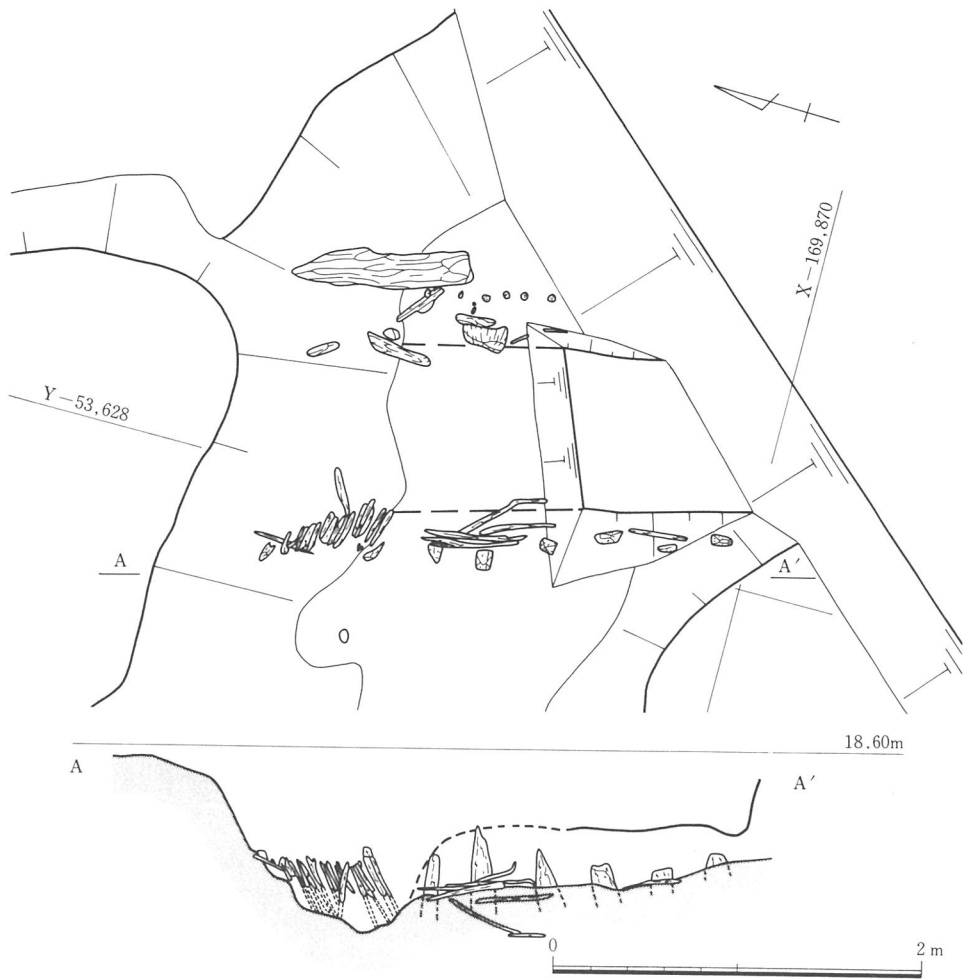
第44图 501-O R 遺物图 7



第45図 924-O I 遺物図

りした状況で確認され、この部分には土盛りも確認されておらず、この部分で水量の調整をしていた可能性が考えられる。また東側部では中央底部に幅50cmにわたって、直径3cm、長さ30cm程度の丸杭を杭列に平行して打ち込んでおり、水流の攻撃面にあたることも考慮すれば補強材の可能性が考えられる。杭材は鑑定の結果、照葉樹林構成のヤブニッケイ類似種やヒサカキが用いられていることが判明した。出土遺物は壺6点(275・279)、甕25点(276~278・284~286)、鉢1点(283)、高杯10点、小型丸底埴4点等がある。甕276・277は口縁端部を内側に肥厚させるものである。甕284~286は外面にタタキを施すものである。280はミニチュア土器の可能性はある。281・282は器種不明である。これらの遺物は河川の埋土内出土のもので、堰の構築時期を示すものではない。

922 (第49~52図；図版23・66~68) II~IV区で部分的に検出した河川で、ほぼ南北に走ると考えられる。幅約24m、深さ2m以上である。埋土は、岸側で褐色系の粗砂層、灰色系の粘土層、灰色系のシルト層等が互層に斜面堆積が認められ、中央部では灰色系の粗砂~中礫層、粗砂~大礫層が互層に厚く認められる。最上層には約40cmの厚さで一様に明黄褐色シルト層が認められる。出土遺物は壺85点(287~294・303~311)、甕279点(297~301・312~324)、鉢5点(302)、高杯151点(325~335)、製塩土器7点(336~341)、手焙形土器1点(343)、タコ壺1点等がある。壺は広口壺と長頸壺に分類す

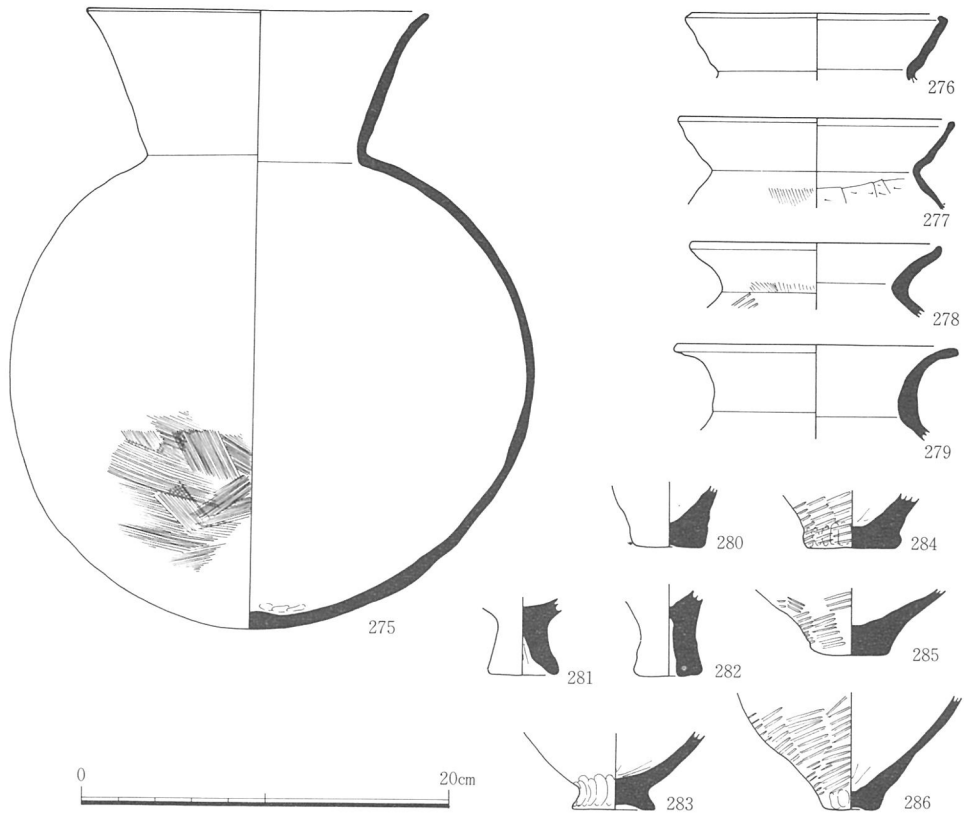


第46図 925-O I 平・立面図

ることができる。広口壺には直立する頸部を持つもの287・288・289・306・309、頸部が体部より「く」の字状に屈曲して外上方に立ち上がるもの290・304がある。288は口縁部を大きく拡張しておりいわゆる二重口縁を呈している。広口壺の外面の文様としては、拡張した口縁部外面に擬凹線を施すもの、竹管文を配するもの、綾杉文を配するものがある。290・311は体部と頸部の境に凸帯が巡り、290はその下方肩部にかけて櫛描直線文と列点文が連続して配されている。長頸壺は量的には広口壺に比べて少なく、文様も認められない。甕は口縁部を「く」の字に外反させるものが多く、体部外面は粗いタタキ目が認められる。内面の調整は板状工具を用いたナデと思われるが317・323のようにハケによる調整と区別されにくいものもある。高杯は杯部の口縁部が外反して稜をもつもの327～332がほ



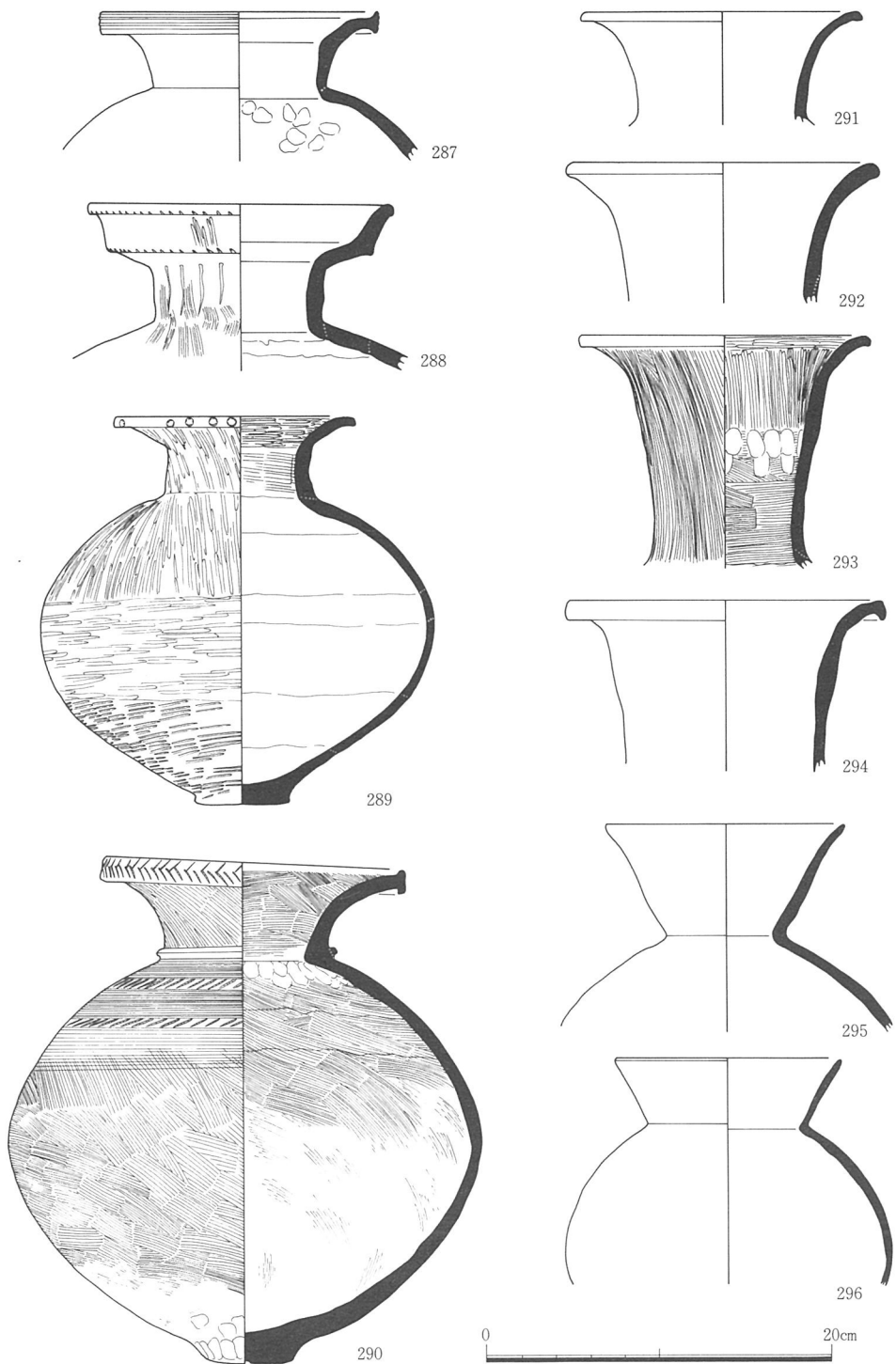
第47図 925-O I 遺物図



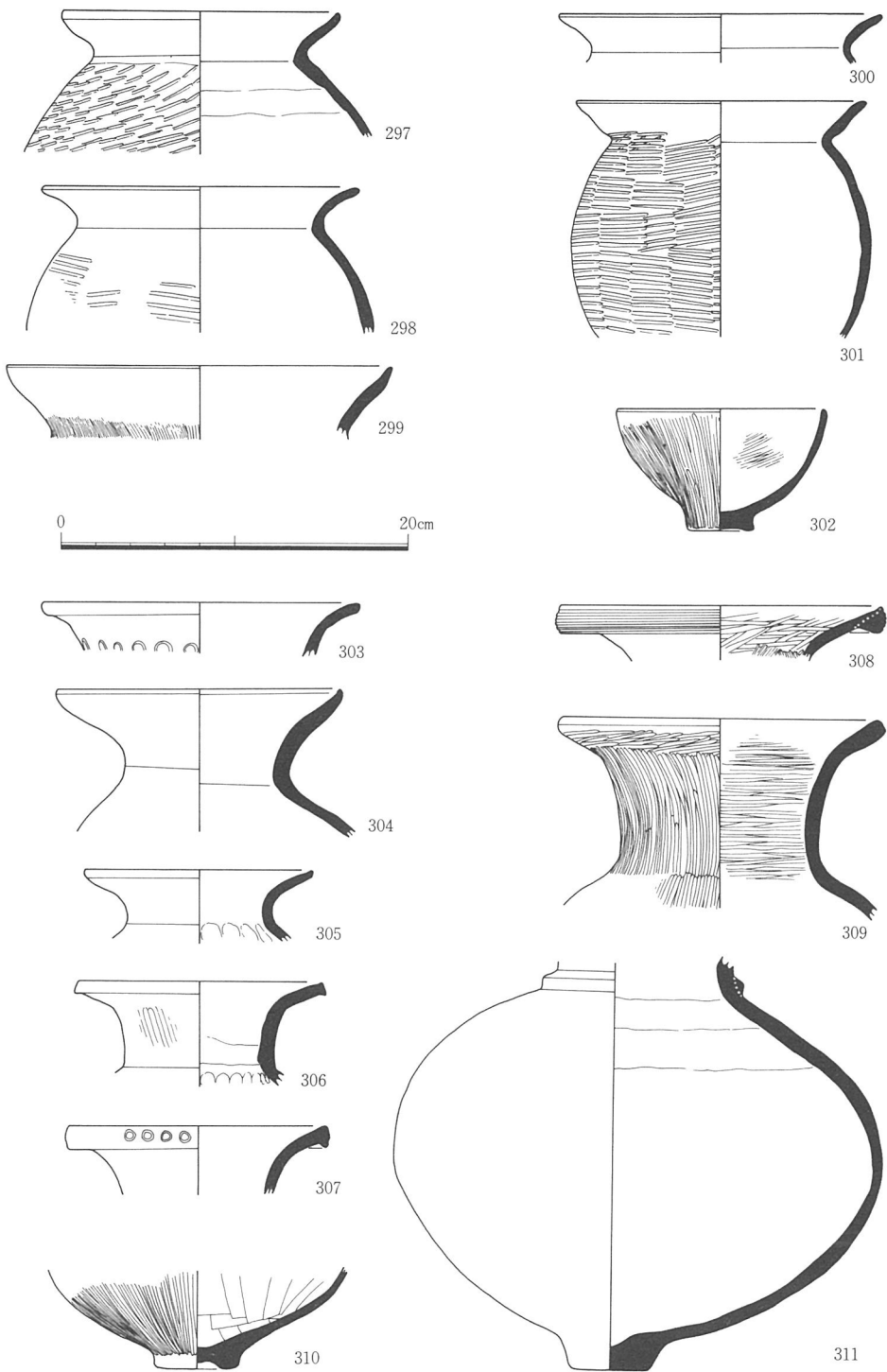
第48図 1360-O R 遺物図

とんどで、椀型の杯部をもつもの325・326もわずかに含まれる。製塩土器は脚部の高いものと低いものに分かれる。高いものは鉢部の底は円盤充填である。手焙形土器は外面に粗いタタキ目を残した低い底部に上部を接合した粗雑な作りである。

926 (第53～55図；図版69・70) IV区南半部で部分的に検出した河川で、ほぼ南北に走ると考えられる。深さは2m以上である。この河川のベースとなる土層は黄褐色シルト層であり、1361-O R等の遺構群の下層遺構である。埋土は岸側で灰色の細砂層、灰色系、褐色系のシルト層が認められ、中央部は下層に灰色系、黄色系の細砂～粗砂層、中～上層には灰色系、褐色系のシルト層が認められる。最上層には灰黄褐色粘質シルト層が約20cm程の厚さで一様に認められた。出土遺物は、壺80点(345～355・358～362・377)、甕83点(344・356・363～375)、鉢6点(357・376)、高杯102点(378～393)等があり、A25WD・XD付近の下層黄色系の細砂層で集中して認められる。壺は長頸壺350～355の占める割合が他の河川に比べて高く、外面はハケ調整で仕上げるもの355、ヘラミガキで仕



第49图 922-O R 遺物图 1



第50図 922-O R 遺物図2